

# 現地報告

## 現地行程

日 程	内 容
12月11日(月)	<p>成田空港発 → グアム空港着 ホテル泊</p>  
12月12日(火)	<p>■グアムの歴史を学ぶ(1)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・太平洋戦争記念館</li> <li>・アブガン砦</li> <li>・ラッテストーン公園</li> <li>・スペイン広場</li> </ul> <p>■現地日本人との交流</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・南太平洋戦没者慰霊公苑 献花 青木さん(グアム日本人会前会長) との交流</li> </ul> <p>ホテル泊</p>  
12月13日(水)	<p>■文化交流</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・グアム大学 キャンパスツアー ディスカッション 昼食会</li> </ul> <p>■グアムの歴史を学ぶ(2)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ガアンポイント</li> </ul> <p>ホテル泊</p>  

日 程	内 容
<p>12月14日(木)</p>	<p>グアム空港発 → サイパン空港着</p> <p>■サイパンの南部・中部の歴史を学ぶ</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・日本刑務所跡</li> <li>・シュガーキングパーク(砂糖王公園)</li> <li>・北マリアナ諸島歴史文化博物館</li> </ul> <p>■サイパン北部の歴史を学ぶ</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ラストコマンドポスト&lt;バナデロ&gt;</li> <li>・中部太平洋戦没者慰霊碑 献花</li> <li>・スーサイドクリフ&lt;ラデラン・バナデロ&gt;</li> <li>・バンザイクリフ</li> </ul> <p>ホテル泊</p> <div data-bbox="986 409 1442 680"> </div> <div data-bbox="986 701 1442 972"> </div>
<p>12月15日(金)</p>	<p>■資料館見学</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・アメリカンメモリアルパーク ビジターセンター 慰霊碑</li> </ul> <p>■戦争体験講話</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・David Sablan (デビッド・サブラン)さん</li> </ul> <p>ホテル泊</p> <div data-bbox="986 1048 1442 1319"> </div> <div data-bbox="986 1339 1442 1610"> </div>
<p>12月16日(土)</p>	<p>サイパン空港発 → グアム空港経由 → 成田空港着</p> <div data-bbox="507 1738 963 1995"> </div> <div data-bbox="986 1738 1442 1995"> </div>

グアム



①太平洋戦争記念館



②アプガン砦



③ラッテストーン公園



④スペイン広場



⑤南太平洋戦没者慰霊公苑



⑥グアム大学



⑦ガアンポイント



①太平洋戦争記念館

第二次世界大戦中の旧日本軍の資料や戦争中のグアムの歴史を、音声や映像で展示している。

②アプガン砦

スペイン統治時代、チャモロ族の反乱に備えて建てたスペイン軍の拠点跡。

③ラッテストーン公園

ラッテストーンと呼ばれる石柱が並べられた史跡公園で、園内には旧日本軍が造った防空壕が残る。

④スペイン広場

グアム行政府や議事堂など数々の政府機関が集まるハガニア地区の中心にある広場。333年続いたスペイン統治時代の史跡が残ることから、スペイン広場と呼ばれる。

⑤南太平洋戦没者慰霊公苑

日米最後の戦いの地に造られた公園。慰霊塔や記念碑がある。

⑥グアム大学

グアム島のマンガラオにある公立のランドグラント大学。

⑦ガアンポイント

太平洋戦争時に日本軍とアメリカ軍の激戦地となった太平洋戦争国立歴史公園内にあるスポット。現在も旧日本軍の大砲が2門ある。



## サイパン



①日本刑務所跡



②シュガーキングパーク

③北マリアナ諸島  
歴史文化博物館⑧アメリカンメモリアル  
パーク

④ラストコマンドポスト



⑤中部太平洋戦没者慰霊碑



⑦バンザイクリフ



⑥スーサイドクリフ

## ①日本刑務所跡

ガラパンの近くにある旧日本軍統治時代に使用していた刑務所。戦時中アメリカ軍の捕虜が収容されていた。

## ②シュガーキングパーク（砂糖王公園）

サトウキビ栽培と製糖事業で北マリアナ諸島の産業発展に貢献した、松江春次氏の功績を称え造られた公園。

## ③北マリアナ諸島歴史文化博物館

北マリアナ諸島の歴史と文化を紹介するミュージアム。日本統治時代の生活様式に関する資料なども展示。

## ④ラストコマンドポスト（バナデロ）

太平洋戦終盤、日本軍が最後に司令部を置いた場所。高射砲や戦車が当時のまま残る。

## ⑤中部太平洋戦没者慰霊碑

サイパン島に数多く建立されている慰霊碑の中で唯一日本国政府が建立した碑。

## ⑥スーサイドクリフ

サイパンの戦いで、敗色濃厚となった多数の日本兵や民間人が、投身して自決した断崖（マツピ山北面の崖）。

## ⑦バンザイクリフ

サイパンの戦いで、追い詰められた日本兵や民間人が、海に身を投じて自決した断崖（岬）。

## ⑧アメリカンメモリアルパーク

1994年に太平洋戦争終結50周年を記念して造られた公園。敷地内のビクターセンターには、米軍によるサイパン島への侵攻、サイパン島占領後の日本本土空襲に関する展示がある。

# グアム・サイパンの報告

## 1 応募理由

「海外事情調査団」としての経験を生かし、世界の歴史や文化についての知識を深め、さまざまな視点から物事を捉えられる人になりたいと思い、応募した。



泉 恵来里

## 2 スーサイドクリフ

私が、6日間で特に印象に残った場所は、サイパンで訪れた、スーサイドクリフだ。「スーサイド」とは日本語で「自殺」を意味し、「クリフ」は「崖」を意味する。「スーサイドクリフ」は、名前の通り戦時中に多くの民間人が飛び降り、命を落とした場所だ。実際にスーサイドクリフを訪れてみると、まずはその高さにとってもびっくりした。とても歩いて登れるような高さでは無く、実際にバスで上まで行ってみると、地上よりも空の方が近いのではないかと思うぐらいの高さがあった。また、崖壁には砲撃や銃撃の跡が多数残っていて、スーサイドクリフの周辺には、当時戦闘に使われた戦車や、日本軍最後の司令塔と呼ばれた「ラストコマンドポスト」もあった。



当時、多くの民間人がここで自ら命を落としたと知ったときは、日本軍の「生きて捕虜になることは恥である」との教えがなかったら奪われなかった命が多くあるのかもしれないと思い、怒りの感情もあった。また、スーサイドクリフの上から、下を見た時に、命の重みを改めて感じた。

## 3 ラストコマンドポスト

スーサイドクリフの近くにあるラストコマンドポストは、天然の岩などが上手く利用されていて、崖の中にうまく馴染んでいた。中に入ってみると、とても広く、しっかりとした部屋のようなだった。しかし、壁にはとても大きい砲撃の跡が複数あり、壁が貫通してしまっていた。砲撃の跡から、アメリカ軍の攻撃の強さが見てとれた。周囲には、戦時中に日本軍が使っていた戦車などが置かれていた。その中でも、印象に残っているのは、とても小さな戦車についてのガイドさんの話だ。「通常は、2～3人乗りの戦車であるが、人手不足により1人で戦車に乗っていた。戦車の中では体感温度はおよそ50℃で、暑さによって熱中症で亡くなる方もいた。」という話を聞き、相手からの攻撃だけではなく、暑さも敵になってしまうような過酷な環境で戦っていたということを知り、日本兵の方達はどのような思いで戦っていたのかが気になった。



## 4 グアム・サイパンの博物館の特徴

グアム・サイパンで訪れた博物館ではまず、戦争に関するショートムービーを見た。ショートムービーは英語だけではなく、日本語やその他の言語にも対

応していた。ショートムービーはアメリカ側の視点で作られていたため、一度日本で学んだことでも、戦争に対しての視点が変わると、別の出来事のように感じた。展示されているパネルには、英語と同じ大きさで日本語が書かれていることが多かったことにも感動した。展示の仕方にも多数の工夫がされていた。例えば、受話器を持ち、テーマが書いてあるボタンを押すと、実際に当時の人と話しているような感覚になる展示があった。

## 5 太平洋戦争記念館



グアムで訪れた太平洋戦争記念館の入り口には、旧日本軍の2人乗り潜水艦が展示されていた。中の展示で特に印象に残った展示は、

「We Can Forgive, But We Must Never Forget」

「許せても、決して忘れてはいけない」

と、書かれていたパネルだ。私はこのパネルを見て、まず自分にできることは、忘れてしまわないように過去の出来事を知り、過ちを認めることなのではないかと思った。「許す」という決断をしてくれた人々の思いを粗末にすることがないように、さらに理解を深め、リスペクトすることが忘れないための第一歩になるのではないかとも思った。また、その言葉から「未来に向かって前進する。」といった、現地の人々の強い思いも感じた。

## 6 アメリカンメモリアルパーク

アメリカンメモリアルパーク内にあるビジターセンター（資料館）では、最初に日本とアメリカの主張や出来事が対照的に書かれた展示があり、例えば日本側の主張では、日本語を一番大きなサイズの文字に強調して表記しているように感じた。実際に日本統治時代に使われていたモノが置かれていたり、再現されていたりしたため、当時のリアルを知ることができた。また、展示の一部で洞窟の中に隠れていた家族の様子を再現するために、赤ちゃんの泣き声とお母さんが赤ちゃんをあやす声が流れていたため、実際にその場にいるような緊張感を感じた。私が一番、当時の様子を知ることができたと感じたものは、戦時中に民間の方やアメリカ兵、日本兵が書いたり話したりしたものが、実名入りで本のような形で置かれていたものだ。ひとつの出来事ごとに置かれていたため、それぞれの立場からの思いが伝わってきた。今まで知らなかった細かい出来事についても知ることができたと思う。

アメリカンメモリアルパーク内にある慰霊碑には、戦争で亡くなった現地の人々の名前や、たくさんのアメリカ兵の名前が刻まれていた。戦争で亡くなった現地の人々の名前を見てみると、自分よりも若い小さな子供や、同年代の人が多く刻まれていて、今、ある平和がどれだけありがたいものかを強く感じた。



### 7 David Sablan さんのお話

サブランさんのお話を聞くまでは、戦時中の日本の行動や統治から、日本に対して怒りや不満を持っている方なのかと思っていたが、お話を聞くと、日本人としての意識が強い人だと感じた。戦争中や戦後の貴重な写真を見せていただいた中で、当時日本に原爆を投下した方との写真があった。日本にとっては、数十万人の命が奪われてしまった悲惨な出来事であり、二度と繰り返してはいけない出来事であるが、アメリカではその方を第二次世界大戦を終わらせた「英雄」として讃えられているという。日本とアメリカの「第二次世界大戦」や「原爆投下」への捉え方の違いを強く感じた。

サブランさんは、「人と人が対話をすることで、世界の平和が築いていける。」と平和に対しての想いを教えてくださったので、今回の貴重な経験を無駄にしないためにも、小さなところから対話を大切にしていきたいと思った。

### 8 異文化交流

異文化交流で特に印象に残っていることは、グアム大学生との交流だ。グアム大学はとても広く、学生も車で通っている人が多く、学内にはとても大きな駐車場があり、日本の大学とは全然違った。大学生とのディスカッションでは、「平和」について意見交換をした。私は、グアム大学に通っている日本人の方と同じグループだったが、ネイティブの方と同じくらいペラペラに英語を話していて、とてもかっこいいと思った。私は、今回目標のひとつに、「現地の方と積極的にコミュニケーションをとる」というのがあったので、グアム大学はコミュニケーションをとる良い機会だったが、緊張してしまい聞き取ることに精一杯になってしまった。また、恥ずかしいという気持ちから、なかなか自分の意見を言うことができなかった。自由時間の時に少しお話ができ、その時は英語でコミュニケーションをとることができたので嬉しかった。グアム大学生との交流から、もっとボキャブラリーを増やすことと、積極的に会話に参加することが大切だと感じた。

また、グアムの生徒と日本の生徒の大きな違いとして、勉強に対する姿勢を指摘していただいた。日本に帰ってきてからは、学校の授業でもグアムに行く前より積極的に参加するようになったと思う。自分の「知りたい」「やってみたい」という気持ちを大切に、グローバルで活躍する人になりたいと改めて思った。

### 9 全体の感想

私は6日間の派遣を通して、命の重さに改めて気づくことができた。戦争の現場に足を運んでみると、その場に行かないと知ることのできない事実や思い





がたくさんあるということを知った。当時、生きたくても生きられない人がたくさんいた中で、現在は、自ら命を絶つ人や、簡単に「死」という言葉を使う人が多くいるように感じる。私は、今回の派遣から、命の重さを他の人よりも知ることができた。しかし、このような経験ができない人、または、したことがない人の方が多い。だからこそ、今回自分がした経験を同世代、自分よりも下の世代に共有し、一人一人が自分の命を大切にできるようにしていきたい。

また、国によって価値観が違うのは当たり前だと思っていたが、自分が思っていたよりも価値観に差があったため、異文化理解や、さまざまな視点から物事を捉えることは本当に難しいということを感じた。同じ過去を繰り返さないためにも、小さなところから対話を重ね、それぞれがリスペクトし合える関係を築いていきたいと思った。





# 歴史の認識と平和の関係

## 1 南太平洋戦没者慰霊公苑

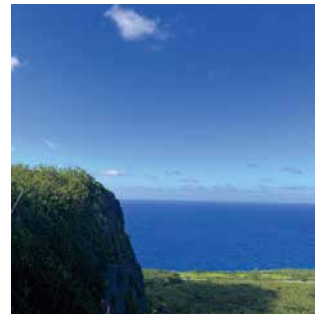
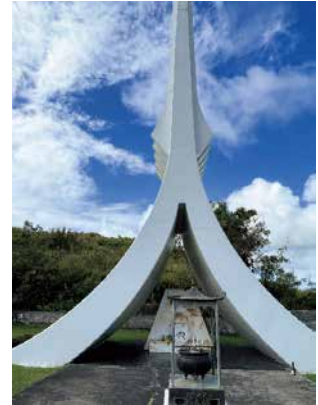
第二次世界大戦のような悲惨な戦争を再び繰り返してはならないという願いを込めて、南太平洋戦没者慰霊協会は表徴的慰霊塔と平和記念公苑を建設した。南太平洋戦没者慰霊協会とは森喜朗元首相や故安倍晋三元首相など、かつてグアムに侵攻していたアメリカの敵国・日本の組織である。

平和寺では、宗教を問わず誰でも世界の平和を祈願できるという意図で、様々な宗教の物があり、さまざまな国籍の人たちが世界中から平和の祈願のためここに訪れている。

私が驚いたのは、太平洋戦争当時、敵と味方同士だった国が、今、平和という同じ思いを抱いて、日本が運営している場所に訪れていることだ。かつて、敵と味方に分かれた国々が、「平和」というゴールに向けて集結している一つの国際協力の具体化であると感じた。



栗城 英茉



## 2 スーサイドクリフ

太平洋戦争末期のサイパンの戦いにおいて、侵攻してくるアメリカ兵によって北に追いやられた多数の日本兵や民間人が行き場を失い自決した場所である。アメリカ兵は投降を呼びかけたが、当時の日本兵や民間人は捕虜になるなら自決しろと教えられていたため、多くの人が自決を選んだという。ここには断崖絶壁がある。自分自身に銃を向け、または手榴弾を使い、その断崖絶壁から飛び降りた。スーサイドクリフ、日本語に直訳すると「自殺の崖」という名がついた。

崖から飛び降りる恐怖は想像できないほど莫大なものであるが、多くの人がその恐怖よりも自決しようという意志が勝ったという状況が、当時の日本の教育の強烈さを感じた。

## 3 バンザイクリフ

ここも追いやられた多くの日本兵や民間人が自決した場所である。アメリカ兵が「天皇陛下万歳」と叫びながら自決する人たちを見て、“バンザイクリフ”と名付けた。崖の高さは水面から約80mしかなく、自決したほとんどの人が衝撃で死にきれなく溺死であった。そのため海は血の海となり、血の匂いでサメが来て死体を食べていたという。とても綺麗な海が、当時真っ赤な血の色と死体で埋め尽くされていたと想像し、戦争の残酷さを感じさせられた。

#### 4 David Sablanさんによる戦争体験講話

Davidさんはサイパンが日本による統治を受けていたころ、サイパン公学校に通っていた。そのため、子供の頃は日本の教育を受けていたという。

一番印象に残った話は、Davidさんの姉のオルガンが憲兵によって壊され、その後父と姉がスパイの容疑で牢獄に入れられた話だ。あとから、オルガンでアメリカ兵にメッセージを送っているという通報があったということがわかったらしい。この話を聞いて、日本の政府による統制の恐怖を感じた。

また、Davidさんの家族が避難した洞窟で近所の人々と一緒に協力して、生き延びていた話も印象深かった。洞窟の中で運動神経に長けた人を選び、サトウキビ畑からサトウキビを盗んできて、3週間もの間それを繰り返していたらしい。この話を聞いて、今はどんどん近所付き合いが少なくなっているが、このような危険な状態にあったら、近所の方たちの付き合いや近所の人に限らず、人々と協力することの大切さを感じた。

Davidさんはサイパン公学校で日本の体操、農業、水泳や食事などを習い、今も当時の食事や運動の習慣を続けていて、とても健康だと語っていた。そのため、日本人を尊敬していて日本が大好きだという。私はこの話を聞いて、とても驚いた。日本の統治を受けて、サイパンが日本の統治下であったからという理由で戦争の被害を受けたのにも関わらず、Davidさんが日本を好きでいられるのは私にはあまり想像できなかったからだ。私が日本で普段生活していても、SNSやニュースなどで主に韓国や中国の反日に関するをよく目にしていたので、国による日本に対する印象の差異が感じられた。

#### 5 日本刑務所跡

この刑務所は1929年から1930年にかけて、日本の政府によって建てられた。第二次世界大戦中、米軍のパイロット2名が収容されていた。雑草や木がたくさん生えているものの、建物の外形がほとんど残っていて、錆びついた鉄格子や銃弾の跡、牢屋の内部の様子を見ることができた。

また、当時収容された米軍パイロットが壁に書き残した文字もはっきりと残っていた。文字を書き残した彼は、June 15/44(1944年6月15日)に自分が死んでしまうと思い、壁に自分の名前とその日の日付を書いたと考えられている。そのため、当時の様子が自然と想像できた。また、当時の日本兵とアメリカ兵のお互いに対する敵対心やその残酷さが、ゾクゾクするほど感じられて正直少し不気味に感じた。



## 6 アメリカンメモリアルパーク

ここでは北マリアナ諸島における第二次世界大戦前後の歴史が展示されている。展示を見てまず思ったのは、日本の歴史博物館とかなり視点が違うということだ。やはり、アメリカにある博物館であるため歴史はすべてアメリカからの視点のものである。そのため、私が今まで学んできた歴史と異なる見方から歴史を学ぶことができた。特にそれを表しているのが、「サイパン戦中に洞窟で避難生活をしてきた現地人を助けるアメリカ兵の展示」と、「マリアナ諸島陥落によって日本降伏という目標に近づいた」と書かれた展示だ。

「サイパン戦中に洞窟で避難生活をしてきた現地人を助けるアメリカ兵の展示」では、「米軍兵士たちは自分たちがキリスト教を信じる民間人であり、日本人ではないということを見せるため洞窟の近くに十字架や聖像を置く。すべての人々が凄まじい空腹と喉の渇きに苦しむ」と書かれていた。何も知らない人がこの展示を見たら、ほとんどの人が日本軍は民間人を苦しめ、アメリカ兵は苦しんでいた民間人を助けたと理解するだろう。逆に考えると、日本の歴史博物館ではこのようなことを学ぶことができない。私は、国によって学習してきた歴史が異なり、それに伴って相手国に対するイメージの違いが生じるということを学んだ。

「マリアナ諸島陥落によって日本降伏という目標に近づいた」と書かれた展示では、「サイパン、テニアンとグアムでは次の戦略的空中戦と空・海での日本の封鎖の役割を担うための準備が行われる。飛行場は新しいB29“超空の要塞”が日本本土への空襲爆撃を行うための発着地として使われる」と書かれていた。これを読んで、日本本土への空襲や原爆が正義であるような印象を受けた。しばしば、SNSなどで原爆はよかったか悪かったかという議論を目にするのが、アメリカ人のほとんどは原爆のおかげで太平洋戦争が終わったという認識をしている人が多い。この文章を読んで、私は初めてアメリカ人がそのように思うことに共感した。

国によって歴史の価値観が違うということを理解していなければ、外国の方と国際関係などについて話す際に、相手を嫌な気持ちにさせたり意見のすれ違いが生じたりしてしまうのではないかと考えた。そのため、異なる視点から歴史を学ぶということの大切さを実感した。





## 7 ラストコマンドポスト



ここは太平洋戦争時に日本軍最後の司令部があった場所だ。その前には防空壕やトーチカとしても使われていた。上に岩を載せて、上から見た時も存在が分からないようにしていたため、この場所をずっと探していたアメリカ兵たちも見つけることができなかったという。しかし、捕虜の日本兵の証言によって見つけられた。中に入ってみるととても薄暗く、足場も凹凸があるためここに長時間いるのはとても不便だろうと感じた。大きな穴が複数あるのがわかるが、これは米軍による砲撃の跡である。



この下にあったのは当時日本兵が実際使っていた兵器を集めて展示している場所だ。自分の身長と同じくらいのもものもたくさんあったが、兵器の内部を見ても人間が入るには窮屈そうなものもあり、この気温が高い地域で窮屈な環境で戦うという劣悪な様子を思い浮かべた。

## 多面的な視点から見るグアム・サイパンの歴史

### 1 戦争に対する多面的視点

今回、私がこの派遣事業に参加した主な目的は、「日本による戦争の被害を受けたグアム・サイパンを訪問することで、日本が受けた戦争被害の視点だけから見た戦争の歴史を捉え直すこと」であった。被害者としての戦争の歴史に加えて、アメリカをはじめとする他国から見た戦争における日本の立場や、日本の関与を知ること、自身の戦争の見方を多面的視点から改め直したいと考えた。

事前の地球市民講座では、元々アメリカ統治下であったグアム、ドイツ統治下であったサイパンを、日本が占領したことを発端として、その後のグアム・サイパン戦が起きたことを学んだ。軍事的・経済的に欲し、日本は他国の領土を占領してしまったのだ。その結果、再度領土を取り戻そうとしたアメリカ軍によって空襲、上陸作戦が決行され、アメリカ人兵士のみならず、アメリカ人、先住民（チャモロ人、カロリニアン人）の民間人の命をも失われてしまった。

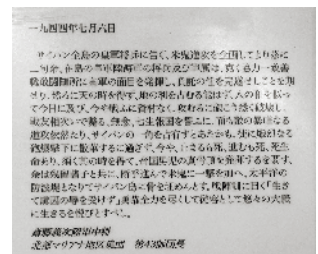
しかし、現地への訪問を通じて、戦争の犠牲になったのは、他国の人々だけではないことが明らかになった。サイパンでは、サイパンの南に位置するLanding Beachesからアメリカ軍が上陸し、それに追われて北方へ逃げてきた多くの日本人の民間人が、現在バンザイクリフ、スーサイドクリフと呼ばれる高い崖から自ら身を投げた。アメリカ兵らは、投降すれば殺さずにキャンプで保護すると崖の上で呼びかけたが、崖までたどり着いたほとんどの日本人はそれに応じることなく自決を選択した。命を助けてもらえるにも関わらず死を選択した理由には、日本の強い教えが影響しており、戦時中、日本は「捕虜になることは恥。」「アメリカの捕虜になるくらいなら天皇およびお国のために自決しろ。」という「戦陣訓」を唱えていた。つまり、アメリカの武器による攻撃だけではなく、日本の自決することこそが美德とする考えが、日本人を殺したのである。戦争とは、国と国同士の戦いであり、敵国の攻撃によって殺されるという考え方が一般的であろうし、私もそう考えていた。だが、サイパンでの上陸戦では、このように多くの日本人が味方であるはずの、自身の故郷である日本の教えに殺されてしまった。

実際にバンザイクリフとスーサイドクリフを訪れ、あまりの高さに私はとても驚いたと共に恐怖を感じた。また、崖の下が海になっているバンザイクリフでは、その海が他の観光客が多く訪れるようなエメラルドグリーンビーチとは異なり、青色が濃く、波が荒かった。あの時見たような荒ぶる海に、あの高さから飛びこむことは、戦陣訓による相当な圧力と心身の疲弊がなければ容易なことではないと考える。それでも飛び降りることを選択させてしまった日本の「戦陣訓」とは、どれほど権威を持ったものだったのかと考えさせられた。

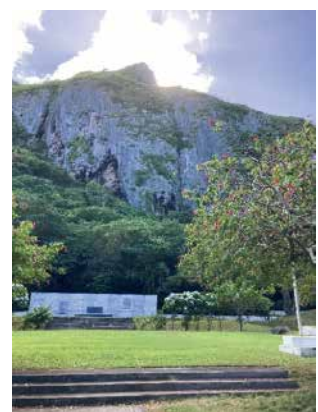
私が日本の学校教育で学んだ戦争の歴史は、「1944年 サイパン陥落」や「8月15日 終戦」「東京大空襲」など、当時起きた出来事を年号や年月と共に教わり、記憶するのみで、それまでの過程や経緯には触れてこなかった。そのため、サイパン陥落に至るまで日本が領土を統治し、後に多くの犠牲者を出す上陸戦が起こったこと、さらにサイパン陥落が日本への空襲や原爆投下の要因となったことも知らなかった。確かに、日本ではアメリカによる空襲や原爆投下で多くの人が亡くなったり、家族を失ったりと非常に悲しい歴史を持つ。しかし、戦争における犠牲



酒井 ひなた



バンザイクリフ (サイパン)



スーサイドクリフ (サイパン)

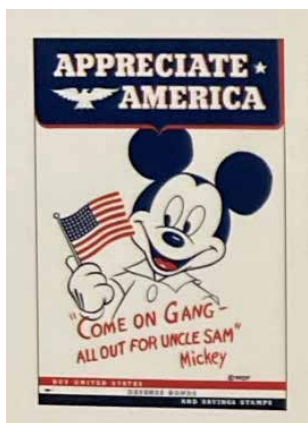
はそれだけではなく、アメリカをはじめとする他国の人々、日本人であっても様々な立場におかれた人々、個々の視点から見れば、多様で複雑なものである。戦争の犠牲は一つの国や一つの人種だけでなく、個々の経験や視点によっても多岐にわたるのだ。

## 2 戦争と子ども

また私は、訪問におけるもう一つの目的として、「派遣を通じて、戦争の歴史だけでなく、その影響が現地の文化や人々に及ぼした影響にも深く触れる。」という点を挙げていた。私は大学での研究を通じて、子どもの時期の育つ環境や学びがその後の成長に大きく影響すること、さらにそこで形成されたアイデンティティが自身の成長の拠り所となることを学んだ。そこで、小さな島で戦争を目の当たりにした子どもたちが、戦争によってどのような影響を受けたのか、アイデンティティへの影響を含め様々な面から調査したいと考えた。



グアム・サイパンでは、日本統治時代、日本人だけでなくチャモロやカリロニアン人の子どもたちにも日本語とその他日本人化政策に伴う教育が行われた。チャモロやカリロニアンの子供たちは、日本人が通う学校とは別に、公学校と呼ばれる島民だけの日本式の小学校に通った。サイパン訪問時にお話を伺った、サイパン公学校で5年間（当時は5年生まで）学んだ経験のあるDavid Sablanさんは、学校で日本語を学び、毎朝日本の国旗を掲揚し、日本の皇居に向かって敬礼をし、神社の清掃を行っていたという。ここまで徹底的な日本化政策をしていたことに驚くと共に、これでは彼らのルーツや信仰をも否定してしまったのではと心苦しい気持ちになった。またグアムで訪れた太平洋戦争記念館には、日本の国旗と戦闘機、戦車が描かれた当時の教材が展示されており、単なる日本人化政策のみならず、先住民の子どもたちに戦争について教える意図も感じられた。



また、教育だけでなく、子どもたちが日常的に触れる娯楽もその手段に使われた。これはグアム・サイパンに限ったことではないが、アメリカ軍と日本軍は、漫画やアニメで愛国主義や戦争の正義を表現し、人々に戦争への関心を持たせた。漫画やアニメは子どもたちの楽しみの一つであり、時には物語の登場人物や世界観が、彼らの目指す人間像や理想、夢となり得るだろう。それらを利用して子どもたちの未来を操るような行為は、非常に冷酷と言える方法だと感じた。

以上のように、戦時下において、グアム・サイパンの子どもたちは母国語や自身のルーツを感じる言語を使うことを制限され、日本語を習得し、使用することとされた。また、言語だけではなく自分の持つ文化までも否定され、日本人となることを強いられた。言語や文化は、人のアイデンティティを形成する重要な要素であり、また自分のルーツである言語や文化を保持できることは、自己肯定感や非認知能力（問題解決力、批判的思考力、協働力、コミュニケーション力、主体性、自己管理能力、自己肯定感、実行力、統率力、創造性、探求心、共感性、道徳心、倫理観、規範意識、公共性、独自性など）の向上に寄与し、親とのつながりも強くする。つまり、異なる言語や文化を強いるような教育は、アイデンティティが



まだ確立段階の子どもたちの成長にとって、悪影響を及ぼしてしまうのである。そのため、グアム・サイパンの先住民の子どもたちが受けた日本の教育は、彼らの言語や文化を奪ってしまっただけでなく、子どもたちの成長にも影響を及ぼしてしまったのではないか。さらに加えて子どもたちに戦争の正義を植え付けるような教育は、子どもたちに他人を傷つけること、差別することの善意を誤って教えることに繋がりがかねないと考える。

一方で、日本による教育を良かったと肯定的に考えるケースもある。サイパンでお話を伺ったDavid Sablanさんは、日本の歌を、表情を暗くすることなく、とても楽しそうに歌ってくださった。今でも日本が大好きで、日本の教育で学んだことが、今の自分の精神の強さに繋がっているようだ。そして最後には、「私は日本人だ。日本が今でも大好き。」とも仰っていた。現地への訪問期間6日間のうち、最終日に設定されていたDavidさんの講話を聴くまで、私は日本による島の占領および強制的な教育は、前述したように完全に悪だったとしか考えていなかった。しかしDavidさんの経験を聴いてから、たしかに日本の教育は先住民の言語や文化を弾圧してしまったというマイナスの面もあるが、島内の教育環境を整備し、多くの子どもたちに教育を提供できたというプラスの面もあったことがわかった。また全ての先住民が戦争に巻き込んだ日本のことを恨んだり嫌いになったりしているのでは、と思っていたが、おひとりでも日本が大好きと語ってくださる方がいることは、日本人としてとても嬉しく感じた。

その他にもグアム・サイパンでの戦争は、心情面だけではなく、身体的にも子どもたちに影響を及ぼした。戦時下において島内では食糧が不足していたこと、日本内地からの供給があっても日本軍が占有してしまっていたことから、民間人、そしてその子どもたちは栄養不足と飢えに苦しんだ。また、人手として労働に使われることもあり、子どもらしく勉強したり遊んだりすることは容易ではなかったと考える。

さらに最も残酷と言えるのは、親が子どもを殺すケースがあったことである。上陸戦では、日本の民間人がアメリカ軍から逃げる際中、子どもの泣き声が彼らに聞こえてしまうと見つかってしまうという理由から、子どもが日本兵や親から殺されることがあったという。自身の子どもを自らの手で殺すことは、親であればそう簡単にできることではないだろう。それでもそうせざるを得ない、相当緊迫した状況に当時の島々は置かれていたと推測できる。また前述した、アメリカ軍に見つかって投降することを恥とする日本の戦陣訓がそのようにさせてしまったとも考える。



### 3 平和の実現のためにできること

私は今回初めてグアム・サイパンを訪れて、スーパーやホテルなどの大きな建物があるのはほんの一部で、その他ほとんどが山やジャングルなど未だ開発されていない状態であることに驚いた。テレビやインターネットで見聞きしたことのあがるグアム・サイパンは、美しいビーチが広がる華やかなリゾート地であったが、それは私たちが宿泊したホテル周辺だけであり、観光客（多くが日本人や韓国人）

もその一部の地域でのみ観光を楽しんでいるようであった。しかし、グアム・サイパンには、その狭い域内から出てそれぞれ車で1時間もかからないところに今回訪れた戦争記念館や戦没者慰霊公苑、バンザイクリフなど、日本と関わりの深い場所がたくさんある。にもかかわらず、ほとんどの日本人観光客は、これらの場所に訪れていなかった。私自身もこの派遣事業に参加するまでそうであったように、今の日本人の多くはグアム・サイパンで起きた戦争やその歴史をほとんど知らず、関心のない状態になってしまっているのではと残念な気持ちになった。

グアム大学を訪れた際、現地の学生であり、中学生まで日本で育った方が、日本人は海外の人に比べて戦争への関心が低いと仰っていた。確かに前述したように現在の日本の歴史教育は十分とは言えないし、若者の関心も低いように思う。2022年に半年間アメリカに留学をした際、親しくなった現地の学生は、第二次世界大戦から今起きている世界情勢まで、様々な話題を普段から話していた。またイギリス在住のイギリス人の友人は、Instagramでほぼ毎日のように最近のイスラエルでの戦況を拡散したり、彼女自身も抗議デモに参加しその様子を投稿したりしている。私たち日本人も今起きている戦争への関心を更に強め、平和の実現に向けて意識を持つためには、何が必要なのだろうか。

私はまず、第二次世界大戦、グアム・サイパン戦のように、既に起こってしまった歴史を知ることが必要だと考える。私は今回グアム・サイパンで起きた戦争の歴史を深く学び、日本で生まれ生きている日本人として、2章で述べたような当時の日本がしたことに対する申し訳なさや、後ろめたい気持ちを持った。しかし、グアムの太平洋戦争記念館にあった「私たちは忘れない、でも許す。」という当時を生きた島民たちの言葉と、慰霊公苑での青木一美さん（グアム日本人会前会長・（財）南太平洋戦没者慰霊協会理事務局長）による、「過去はどうしようもできない。これからどうするか、未来志向で考えることが必要。」というお話を聞いて、今を生きる私たちは、単に過去の歴史を振り返ってその場で気づきを得るだけでは不十分であると痛感させられた。その気づきを片隅に置いたまま、それを活かして、同じようなことを二度と繰り返さないようにと思い、行動することが私たちには何より重要なことなのではないか。第二次世界大戦は残酷だった、だから二度と起こしてはいけないと感じ、平和を希求することで、今各地で起きている戦争も決して起こしてはならないものだという意識を強めることができるだろう。

以上のように、私はこの派遣事業を通じて、歴史は必ずしも単一の視点で理解されるべきではなく、多面的な視点から考えることが不可欠であると感じた。戦争の悲劇を知ることで、未来に向けて同じ過去を繰り返さないようにするためには、異なる視点からの理解と共感が重要であるだろう。そして、これからも多様性を尊重し、共に平和を築くために学び続ける姿勢を大切にしていきたい。

さらに私は2024年度から、保育園や学童施設を運営する企業に就職予定である。現場で働く方たちと共により良い施設やカリキュラムをつくっていく社員として、子どもたちに平和の大切さを伝えていきたい。戦争の背景にある人種差別や暴力の危険性を教えつつ、Davidさんが仰っていた「対話の大切さ」を感じてもらうことで、これ以上、戦争による子どもの犠牲者が出ないように、次世代に向けて、戦争のない平和な世の中の創造に貢献していきたい。

#### 参考文献一覧

岡崎渉 (2021) 『外国人の子どもに対する教育の現状と課題  
—子どもの権利保障の観点から—』(「兵庫教育大学研究紀要」第58巻)

山口誠 (2007) 「グアムと日本人」岩波新書

一般財団法人日本生涯学習総合研究所「非認知能力について」

<<https://www.shogai-soken.or.jp/non-cognitive-skills/>>

2023年12月23日アクセス

# 戦争と対話

## 1 はじめに

学校の歴史の教科書を読んだとき、生徒たちは何を思うだろうか。活字を目の前にして、学べるのは事実であり、学習目的も大概はテスト対策や受験でどうしても受け身になりがちだ。ほとんどの場合、「そんなことがあったんだ」という感想を抱くのみで、それら活字を読んでも平和実現のための何かしらの行動原理となり得るようなインパクト、インプレッションは受けない。そこに私は問題を感じた。過去に起きた悲惨な事象が、主観的な視点を介さず次代に継承される。そして継承自体も、主体的ではなく義務的なものになりつつあると感じた。それを感じたことで、当時について知りたくなった。

太平洋戦争は何を生み、「絶対国防圏」と言われるサイパン島陥落にはどのような過去があったのか、現地の方々は何を思っていたのか。そこで、このグアム・サイパン研修に応募した次第である。以下私が研修で学んだことを実際の写真を交えながら紹介する。

## 2 南太平洋戦没者慰霊公苑

南太平洋戦没者慰霊公苑は、グアム島の北部、ジーゴという場所に位置している。太平洋戦域に散華した者を慰め、世界の恒久平和を祈念するものである。ここには慰霊塔や平和を祈る家、周辺の森林奥深くには当時日本軍が使用していた防空壕や、飲料水槽がいくつもある。南太平洋戦没者慰霊公苑の管理者である青木さんは、現地住民の方々の言葉として「許すが忘れない」という言葉を紹介してくださった。日本人が過去に私たちにしたことは決して忘れることはないが、許すという言葉だ。戦争体験者の方々の、過去を恨むのではなく未来を選ぶという強い意志が読み取れる。

あたりは緑で生い茂っていた。戦争があった時もこの辺りは森だったようだが、ここで戦争があったとは考えられなかった。だが、奥へと続く階段を下ってみると、そこには洞穴や貯水槽、防空壕などここで戦争があったことを物語る戦跡があった。（下図）

## 3 バンザイクリフ

目の前に広がる、青くそして鮮やかな、広大な空と海。雲は一つもなく、何も知らなければそこはただの楽園のようだった。だが横にはいくつもの慰霊碑と、当時の状況を微塵も感じさせない、下に青い海が広がる崖が見えた。いくら現実だと言っても、ここで大量自殺が起きたとは想像もできず、そんなことを考えたくもなかった。



田中 翔太郎







左図は、海を見つめる親子を表した像である。右側の大きい像が親で、左側の小さい像が子である。よく見てみると、この像は同じ向きに立っており、海に対しても斜め方向を向いている。ガイドさんによれば、この像は愛国心を表しているそうだ。その象徴として、この二つの像が重なるように海方向を見た先には、直線距離にして2,300kmも先の、皇居があるようだ。自らの死を決断してもなお国や天皇への敬意を払う、まさに「万歳クリフ」なのだと思う。

戦没殉難者慰霊塔というものがあった。この慰霊塔は祈りを捧げるために手を合わせている様子を表している。中央の慰霊柱には「戦没殉難者慰霊塔」の文字が刻まれ、上部には石の地球儀が据えられている。それを包み込むように、石板が合掌する手を表現している。また、その横には今の上皇様が訪れた時に詠んだ句が刻まれていた。

「あまたなる命の失せし崖の下海深くして青く澄みたり」

80mも下の海へ身を投じた1万人の命が失われたこの場所は、今はその姿を想起させない、青く澄んだ海となっている。改めて、過去に起きた悲劇を、痛感した。

#### 4 スーサイドクリフ



目の前に立ちはだかる、岩という牙をむくその崖は、まさに異様な空気を放っていた。真下から眺めると、その岩肌は黒くゴツゴツしている。大量自殺が起きた現場としてその光景を目にすると、息が詰まるような、とても不思議な気持ちに襲われた。胸がとても締め付けられた。

近くから見ると、まさに本当のクリフと言える断崖絶壁であった。その下には中部太平洋戦没者慰霊碑がある。石碑の台座の下には亡くなられた方の遺品が収められ、碑には「さきの大戦において中部太平洋の諸島及び海域で戦没した人々をしのび平和への思いをこめてこの碑を建立する」と刻まれている。



崖の方に視線を移すと、そこには巨大な傷が無数に存在していた。ガイドさんによると、下に日本軍の基地があるという情報をもとに、アメリカ艦隊が艦砲射撃を行ったらしい。右から左へと続くその深い傷と、いくつもの穴が当時の状況を物語っている。



崖に近づくと、岩があった。林も生い茂って日光があまり入らず、とても暗い雰囲気醸し出していた。海とは違いここに落ちてくれば助かるものはほとんどいない。そんな状況を想像できるこの岩肌からは複雑な、悲慘な情念を抱いた。



奥には周りの岩と同化している建物、ラストコマンドポストがあった。外壁はコンクリートだが、上部には土が被せられており上空からの偵察で見つかりにくいようにされていた。当時、捕虜になった日本人兵によって基地の

存在が明かされたことで、基地周辺が攻撃された。砲台や使われなくなった戦車は今も残されている。

スーサイドクリフの上に行くと、見渡す限りの青い海と青い空が広がっていた。遠くにはバンザイクリフ。下には絶壁。落ちてしまえば死んでしまう。当時はここから艦隊が見えたはずだ。ここで身を投げた方達は何を考ながら飛び降りたのだろう。アメリカンメモリアルパークで鑑賞させていただいた映画では、彼らは崖の前で一步も踏みとどまらずに飛び降りていた。もしかすると彼らには、後ろから敵国軍が攻めてきている恐怖と、捕まってはならないという当時の教育の影響で、自決という手段しか残されていなかったのかもしれない。今はそのようなことを微塵も想像させないこの絶景、環境の風化というものを恐ろしく感じた。



### 5 戦争講話 (David Sablan 氏)

92歳の今でも健康的かつ知的な印象を受ける元観光局会長、現在も経済界の重鎮として活躍し、戦争体験を語り継いでいるデビッド・サブラン氏に話を聞いた。サブラン氏は日本の委任統治領だった戦前、公学校で5年間学び日本語を取得され、今現在も多少話せる。今回は講話の質を高めるべく英語を主体とし、通訳の方に日本語への通訳をしていただいた。



サブラン氏は今もなお日本が好きで、感謝していると何度もお話しされた。その理由の一つとして、健康の秘訣が関係しているようだ。サイパンが日本の委任統治領だった頃、毎朝、北に向かって最敬礼したのち30分間の体操をしていた。そして納豆や、そろばんなどが健康のもととなり、これらを教えてくれた日本には感謝しているという。

また、戦後60年を迎えた2005年、今の上皇にあたる天皇皇后両陛下がサイパンを訪問された。このときの訪問は天皇陛下の強い希望で実現した前例のないものであったこともあり、韓国コミュニティが訪問を阻止しようとデモを行った。そこでサブラン氏は彼らに対し、デモをやめないのならばここから出ていけという決然たる態度を示したようだ。こうした尽力に支えられ、両陛下は無事慰霊の旅をまっとうされた。

日本への深い愛を持つサブラン氏だが、戦争が起きて世界情勢が不安定な今だからこそ、戦争をなくすためには対話が重要だとおっしゃっていたことが心に残っている。サブラン氏本人の言葉として、“We need to speak each other.”があった。世界で様々なことが起きている今だからこそ、対話という意見共有が重要であり、対話が平和を築くとおっしゃっていた。そのような対話が必要とされているこの時代、問われるのは言語力だという。だからこそさまざまな言語に若いうちから触れ、習得することが重要なのだそうだ。平和を築く対話の実現のためにも、言語学習は必要だというサブラン氏の考えに共感した。

## 6 グアム大学



グアム大学に訪れた目的は、異文化交流である。戦跡巡りや講話とも異なるため直接戦争に関して学習したわけではないが、私の「平和に対する考え」を思考する上でとても参考になった。それについて紹介する。

戦争とは直接的な関わりが薄いグアム大学を訪問したことの意義について、私は「戦争があった場の今を知る」ことと、「同年代での異文化交流」であると思った。今を知ることで歴史的な出来事、文化への理解が深まり、その土地の人々の経験や価値観を尊重できるようになる。つまり「今」（＝戦争後）を知ることで「過去」（＝戦争当時）への理解が深まるということだ。そして、同年代での異文化交流をすることで互いの国について知り、意見共有で平和について考える。それによって、同学年で平和に対する価値観の共有ができる。これを踏まえ、最後の項目で私の考えを述べる。

## 7 最後に

海外事情調査を通して、過去に実際にあった事象、戦争の悲惨さ、応募動機でもある「戦争体験者の言葉」を知ることができたと同時に、私自身の平和に対する考え方を改めることにも繋がったと感じる。青木さんから教わった、「戦争を繰り返さないために忘れない」ことと、未来を選ぶ決意。サブラン氏の、「対話を通じた意見共有で未来へと繋ぎ、平和を築く」という考え。これらを踏まえ、「未来へと焦点を当てた、国を超えた対話」が平和のために重要であると私は感じた。

戦争と平和は対義語関係にあるとは言われてきているが、私は、戦争の対義語は対話だと考える。戦争も対話も、どちらも国同士の外交という点で共通するが、実際、戦争とは、対話という外交手段を放棄したことによる、劣悪非道な、一線を越えた暴力なのである。対話という協調する手段を自ら放棄し、戦争という形で意見を押し通すのだ。だからこそ、戦争と対話は対義語関係にあるし、戦争をなくすためには「対話を通じた意見共有」が必要となる。

だから私は、平和とは「未来へと焦点を当てた、国を超えた対話」がなされている状態だと考えるようになった。将来、戦争という名の外交ではなく、平和のために、対話という協調が行われ続けることを願う。



# グアム・サイパン研修 現地報告

## 1 はじめに

今回の国際交流体験ツアーでは、南国の地、グアム・サイパンを訪れた。ここでは、戦時中の過去のことや歴史などを学んだり、現地の方たちとの交流をしたりした。そこで学んだことは、とても大きなものだった。今ではリゾート地としての印象が強い、この地域が過去に戦争の舞台であったことなど教科書で習った歴史を、現地で実際に見ることで、より深く学べた。この地で得たことを少しでも多くの方々に知ってもらうために、以下では現地を訪れて特に印象に残ったことなどを中心に、私が何を思ったのか、何を伝えたいのかを述べていく。

## 2 グアム

### 2-1 太平洋戦争記念館

グアムで一番初めに訪れたところだ。ここで学んだ第二次世界大戦中のグアムについて述べていく。1941年12月7日、太平洋戦争が勃発した。日本はグアムを「大宮島」へと改名。日本統治が始まった。そして、1944年7月21日、アメリカ軍がグアムへ上陸。3週間もの間激戦が繰り広げられ、最終的にはアメリカ軍がグアムを占領。

ここで、なぜグアム島が戦争において重要だったのか。それは、グアム島はマリアナ諸島で最も面積が大きく、フィリピン、日本、ハワイを結ぶ中心に位置し、停泊港が存在していたからだ。これにより、アメリカ軍は、この地を燃料補給と連絡の拠点としていた。

私は右の写真「爆撃などにより住む場所を失った人々」を見て、言葉を失ってしまった。英語を和訳すると、「もしあなたがホームレスとなり、地下での生活をせざるを得なくなったらどうするか。多くのチャモロの人々は、それをやってきた」とあった。戦争は、兵士だけでなく、関係のない市民までも巻き込むのだ。それでも、当時、毎日が死と隣り合わせであったとしても、必死に生きていたのだ、と思うと胸が痛くなった。

### 2-2 南太平洋戦没者慰霊公苑

公苑の理事であり、グアム日本人会の前会長でもある青木さんに解説してもらいながら、この公苑で多くのことを学んだ。ここでは、グアムで起きた戦争を忘れないようにと、地元の人々や軍人などによって、今も大切に守られている。

まず、公苑に入るとすぐにある平和寺は、宗派にとらわれず、全ての人が恒



寺澤 太星



(写真) 爆撃などにより住む場所を失った人々 (歴史館内の展示)

久平和を願いましょう、という意が込められている。公苑の象徴的な存在である慰霊碑は、平和の願いを表し「手と手を合わせる」合掌をモチーフにデザインされている。裏にはジャングルがあった。（実際には、見学用に最低限の道は整備されていた。）そこには防空壕がいくつかあり、実際に見るのは初めてだった。

また、慰霊碑の前で、僭越ながらも私が派遣団を代表して献花し、黙祷を行った。

### 3 サイパン

#### 3-1 北マリアナ諸島歴史文化博物館

ここでは、ガイドの説明も加わりながらサイパンの歴史について学んだ。サイパンも第二次世界大戦中の戦争の舞台であり、歴史的にも重要であった。それは、サイパンは、後に戦争の終結を決定づけていくことになるB-29の飛行場となっていたことだ。B-29の飛行可能距離は当時、約5,000kmと言われており、日本との距離はサイパンから約2,400km。よって、往復が可能であったのだ。この事実が戦争の勝敗を決めたと言っても過言ではないという。

#### 3-2 バンザイクリフ・スーサイドクリフ

私が、このツアーに参加した理由の一つとして、学校の授業で習って、最も印象的だったバンザイクリフを実際に見たかった、ということがある。行ってみると、バンザイクリフは崖としてはそこまで高さがなく、下を見下ろすと海が、黒っぽい青色をしていて何とも言い難い冷酷さを感じた。バンザイクリフとは、当時アメリカ軍に追い詰められていた日本軍が、敗戦だと分かっているも、「アメリカの捕虜になるくらいなら、自決しよう」と、多くの日本兵が「天皇陛下万歳」と身を投げたことから名づけられた。

崖の近くには、多くの慰霊碑があり、その中心には、日本の方角を指すように立地している、「親と子を表す白の慰霊碑」があった。

続いては、スーサイドクリフについてだ。バンザイクリフからも見てわかるほどの断崖絶壁で、約200mもの高さがあるという。日本兵を含む、多くの民間人がアメリカ軍から逃げていき、ジャングルをようやく抜けてたどり着いたのが、この崖だという。とうとう逃げ場を失った人々は次々と身を投げていき、死者は1,000人を超えるという。

この二つの崖を目の当たりにして、本当に心苦しくなってしまった。



(あまり高さがなくわかる)



(下から見たもの)

### 4 戦争体験者の方の講話 ～David Sablan氏～

我々はサイパンで戦争体験者の方の貴重なお話を拝聴する機会があった。David Sablan氏（以下、サブランさんと言う）の話だ。サブランさんはサイパンに生まれ、小学生時代はサイパン内の日本の公学校に通っていて、日本の教育を受けていたそうだ。しかし、それは小学生時代だけのこと。お話をいただいた時には92歳という年齢でありながらも、素晴らしい日本語を我々に披露してくれた。

ここでサブランさんの戦時中のことについて少し話をしていく。日本の公学校では、朝は勉強、午後は農作業をしていたそうだ。そのため、昔から活発であったと言う。また、爆撃の音が鳴り響き、落ち着かないときには、姉のオルガンの音色を聞いて、心を和ませていたそうだ。しかしある日のこと、姉のオルガンがスパイ行為だと日本兵に疑われ、ついにはオルガンを壊されてしまった。

だが一番驚いたのは、今も昔も日本が大好きだと言うことだ。実際にサブランさんは、日本人にもっとサイパンへ来てほしいと大歓迎してくれた。こんなにも日本を愛してくれているのだと知り、私も嬉しくなった。

### 5 その他

グアムでの「ナイトマーケット」が私にはとても新鮮だったため、紹介したい。グアムでは毎週水曜日にナイトマーケットと呼ばれる小さいお祭りのようなものが行われる。我々もそこへ参加した。すべての商品について値段が格安で、ほとんどのものが自分たちのハンドメイド品であるのだと言う。私は音楽に合わせて現地にいた方とダンスをした。難しく、苦勞したが、とても良い経験になった。

また、グアム大学の学生と交流する機会があった。当初は不安がかなりあったが、学生の方々は楽しそうに話してくれたため、こちら側も気軽に話すことができた。

### 6 伝えたいこと

私が今、伝えたいことは主に2つある。

1つ目は、やはり戦争は本当に恐ろしいものであるということだ。私も含め、現在を生きる我々は実際に戦争を体験したという人が少ない。しかし、グアム・サイパンを訪れて現地を見た、多くの防空壕、歴史資料館の展示にある



ナイトマーケットの様子



グアム大学での学生との交流



心苦しい写真、多くの人が身投げをしたバンザイクリフやスーサイドクリフなどを見ると、見て見ぬふりをする事は決してできない。戦争は関係のない人々を巻き込み、簡単に人の命を奪ってしまうのだ。今ある平和が当たり前ではないのだと言うことを、もう一度考えてみてほしい。

2つ目は、積極的な海外への挑戦である。海外に興味がある人がいる一方で、それ以外の人たちは海外への挑戦を拒んでいるように見える。それには、日本との文化的・習慣的な違いに恐れを抱いているからだと思う。私もそうであった。仮にそうであったとしても、それは経験として非常に大きな意味を示すはずである、また、日本的な視点だけで物事を捉えるのではなく、他の国に訪れてみて、話し方や考え方、習慣、儀式などを学び、様々な視点で物事を捉えていくと、また違った発見ができるかもしれない。少なくともグアムもサイパンも我々日本人を大歓迎してくれているため、この機に訪れてみるのはどうだろうか。

# グアム・サイパンで学んだこと

## 1 はじめに

今回のツアーでは、グアム、サイパンの地で第二次世界大戦の影響を実際に見聞きすることで、教科書では伝えきれない歴史の背後に隠れた人間ドラマや苦悩をより具体的に理解できた。戦争がもたらした悲惨で残酷な痕跡は、現在も島全体に刻まれており、その現実を目の当たりにしたことで改めて平和の尊さと重要性を再確認した。



徳永 栄子

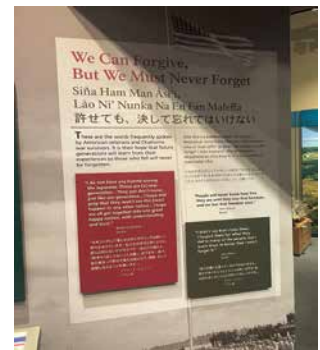
## 2-1 グアム 太平洋戦争記念館

この記念館の前には日本軍の特殊潜水艦が置かれている。全長は80ftで、「乗務員室は最小限にされており快適さを無視した設計になっている。」と書かれていた。

この記念館は戦争の実態を映像や音声、展示物などで知ることができる。私達は最初に映像を見た。この映像はその当時の状況や、先住民チャモロの人々の戦時中の暮らし、日本の統治など、この映像を見るまで知ることができなかったアメリカ軍側の視点での動画になっており、とても貴重な学びとなった。

数あるパネルの中で一番印象深いものは“許せても決して忘れてはいけない”という言葉が書いてあったパネルである。その考え方に、許さないということを相手国に言い続け憎むよりも、繰り返さないように歴史として残し、みんなで平和を願っていくことの方が大切だと感じられた。

また、第二次世界大戦中、人々の思想を操作するためにプロパガンダというものが用いられていたということを初めて知った。「映画やポスターなどを主に使い愛国主義や犠牲と徴兵を促すだけでなく、憎しみ、恐怖、人種差別を植え付ける効果があった。」と書いており、集団自決や現代に繋がる人種差別などもこのような教育が強く影響しているのかと思うと、より深く学ぼうと思った。



## 2-2 グアム ラッテストーン公園

この公園にはラッテストーンというチャモロ人の古代文化の遺跡がある。チャモロ文化には文字というものがなかったため、説として様々な言い伝えがある。まずラッテストーンには様々な大きさがあり、これは地位によって違ったといわれている。次に、この石の用途としては、高床式住居の土台として使われていたのではないかという説が有力である。また、この石は写真の通り石の柱の上にお椀が乗っているような形をしている。これは当時たくさんのネズミがいて、ねずみ返しのためにこのような形状なのではないかという説や、ラッテストーンをひっくり返すと、骨が出てきたためお墓だったのではないかという説もある。そしてまだたくさんのラッテストーンがグアムのジャングルなどに残っているとされている。私はここでの学びを通して、これらの巨大な石をどのように運んだのか、文化や生活にどのように結びついたのかと様々



な想像を掻き立てられとても興味深かった。

### 2-3 グアム 南太平洋戦没者慰霊公苑

この公苑内には慰霊碑の他に日本軍の防空壕や雨水や川の水を貯めていたとされる水槽などが残っている。また併設された平和寺には日本軍の遺品なども展示されている。ここに作られた慰霊碑は高さ15mほどあり、手を合わせているように見えるのが特徴的である。



少しジャングルの中に入ると見えてくるのが防空壕である。ここは日本兵が作戦会議や司令部として使われていた場所であり、最後の激戦地としてこの壕のなかで60余名の将兵が自決をされた場所である。実際に見ると、私が想像していたよりもはるかに薄暗くて狭く、たくさんの方が隠れていたり、暮らしていたとは思えない場所だった。また、日本の防空壕の特徴として必ず出口があるということを知った。



少し登ったところに付近の川の水や雨水を貯めていた日本軍飲料槽があり気温も高く水が重宝されていたことがわかる場所であった。平和寺には日本軍の遺品が展示されており、当時使われていた食器などが展示されていた。驚いたことに、この遺品を見た自衛隊の方々は今も使っている形と変わらないと仰っていたそうだ。

### 3 青木さん(グアム日本人会前会長)のお話

青木さんに質問をさせていただく機会があった。その中でも私が一番心に残っていることは、「私達が今後具体的に平和を目指していくためにはどのようなことに取り組むべきだと思いますか」という質問に対して、「まずそれぞれが平和意識を持って活動していくことが大事で、困っている人が周りにいたら手を差し伸べるなどボランティア活動をしていくことが大切」と仰っていたことだ。平和を目指すということは、一人一人が自分の日々の生活の中で平和意識を持ちながら自分にできることを実践すること、その活動が平和な社会への変化につながっていくことを学んだ。



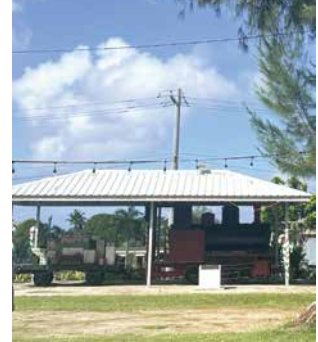
### 4-1 サイパン シュガーキングパーク

シュガーキングパークとは、日本統治時代にサトウキビ栽培と製糖事業で北マリアナ諸島の産業発展に貢献した松江春次さんの功績を称えて1934年に造られた公園であり、当時松江春次さんが砂糖王（シュガーキング）と呼ばれていたため公園の名前もシュガーキングパークとなった。松江春次さんは、砂糖の研究を長い間行い、日本で初めて角砂糖を作った。また、さとうきび畑はサイパン島全体にあり、島の経済を潤わせた。このパーク内には松江春次さんの銅像があり、戦時中アメリカ本土から「決して壊すな」という命令があったとされ、壊されることはなかった。銅像自体は綺麗に残っていたが銃弾の跡が銅像に3箇所程あるのを見て戦闘の激しさを感じた。





このパーク内にはサトウキビの豊作を願って作られた神社である彩帆香取神社と銅像の他に、復元されたサトウキビを運搬するために使われた蒸気機関車が置かれている。当時はサイパン島内全体に機関車用線路を作っていた。また、当時の子供達は機関車に乗っているサトウキビを走っている機関車から1本取り、その取れたものの長さを競う遊びをしていたというお話が特に印象的だった。



### 4-2 サイパン バナデロ (ラストコマンドポスト)

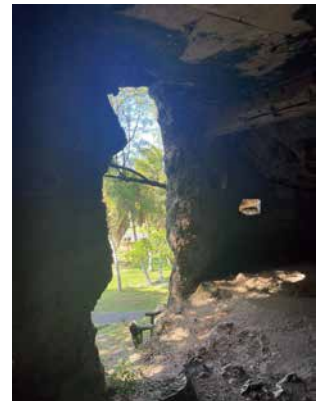
ここは、太平洋戦争時に日本軍最後の司令部があった場所、ラストコマンドポストである。バンザイクリフやスーサイドクリフとも近い。戦車や高射砲、慰霊碑などが置かれている。慰霊碑の名前は中部太平洋戦没者の碑と言い、碑の石材などはすべて日本から運ばれたものである。



またこの写真の戦車は軽戦車であり、定員は3名ほどで当時は人手が不足していたため、2人で運転していた。サイパンは灼熱の地であるため乗った時の体感温度が50℃になる。これを原因として亡くなる方もいたそうだ。



そしてサイパンにおいて、日本軍最後の司令部が置かれたとされるジャングルの中に溶け込むように洞窟状の窪みに造られたトーチカは、アメリカ軍の砲弾が直撃し、直径2m程の穴が突き抜けるように2箇所空いている。ここには子供などたくさんの住民が逃げて来ていたため、多くの人々がこの砲弾によって亡くなられた。



日本はアメリカ軍が上空から撃つてくると想定して空に向けて撃つための大砲などを置いていたため陸用のものは少なかった。そのため、上陸して攻めてきた時には、使い方を変えて大砲を横に倒し間違った使い方をしていたため先端に亀裂が入り、撃つ時にその破片などが飛び散り、それによって怪我をする人や亡くなる方がいたそうだ。ここでは日本軍がいかに人手と武器が不足していたのかということがわかった。実際に砲弾のあとを見て想像以上に当たった時にできた穴が大きく、戦争の恐ろしさを覚えた。

### 4-3 サイパン スーサイドクリフとバンザイクリフ

スーサイドクリフは北マリアナ諸島サイパンの北部に位置し、マッピ山北面の崖のことである。敗戦が近づく一方、多くの日本兵や民間人が自決をした場所である。高さが249mもあり、落ちたら即死であったそうだ。まだこの真下のジャングルには未発見の自決をされた方の骨がたくさんあるという。崖の上から下を見下ろす機会があったが、やはり想像以上に高く、立つだけで足がすくむような場所だった。また、ここには多数の慰霊碑がある。中でも印象的なのはサイパン高等女学校の慰霊碑であった。私は高校生ということもあり、同じ年代の人がここで短い人生を終えるという選択をせざるを得なかった状況であったということにとっても胸が苦しくなった。



バンザイクリフは北マリアナ諸島の最北端に位置する岬で、太平洋戦争末期に追い詰められた数多くの日本人が、日本に1番近いとされているこの場所から「万歳！」と叫び、80m下の岩場に面する海に身を投じた悲劇の場所である。また、80mという高さは即死する高さではなかったため、多くの人溺死し、亡くなられた方の血がサメなどを呼び寄せ、食べられてしまう方もいた。実際に行くとそこにはたくさんの慰霊碑が置かれてあった。私はガイドさんのお話の中で、落ちた先にはたくさんのアメリカ兵がボートに乗って降伏を呼びかけていたが、多くの日本人は聞く耳を持たず次々に飛び降りていった。その当時の日本では、降伏するくらいなら自決をすることが正しいとされていた教育に恐ろしさを覚えた。

## 5 David Sablanさんのお話

戦争体験者であり日本委任統治時代のことを知るデビッドさんに、貴重なお話を聞く機会があった。デビッドさんは戦争というものに対して、戦争は必要のないもので相手国をリスペクトしていくことが大切であり、それが欠けてしまうのはいけない。そして「対話が一番大事である。」と仰っていて、とても心に響いた。その他にも、2016年に天皇がサイパンに来られるとなった時、韓国の方が「天皇がサイパンに来るなら私たちは抗議をする。」と言ってきた。

だが、天皇両陛下は実際に来られた際、予定にはなかった韓国の慰霊碑にも訪れ、手を合わせた。それを見たデビッドさんはすごく温かな真心に触れたそう。そして、今でもデビッドさんのアイデンティティは日本にあり、今でもNHKを見たり、白米を食べたり、ラジオ体操をしたりすることが健康の秘訣だと仰っていた。

## 9 終わりに

このツアーを通して私はわかったこと、得たことが2つある。

1つ目は戦争の現場に足を運び、現地の文化や当時の状況を見聞きすることで、どこか遠くにある過去の出来事のように感じていた歴史が、具体的な感触として心に残り、戦争があったという事実をより身近に感じることができた。

2つ目は戦争の傷跡が残る地で平和について考えることにより、平和の重要性をより強く感じられた。これから先、平和に対する思想を共有していくことや、過去の歴史や今も続く文化を多方面で理解していくことが重要であり、国を超えた対話、相手を尊重していくことが大切であることを学んだ。これからの将来にも繋がる貴重な経験となった今回のツアーでの学びをさらに深め、戦争のない平和な社会に貢献していきたい。

# グアム・サイパン国際交流体験ツアー派遣報告

## 1 はじめに

今年度の国際交流体験ツアーは、第二次世界大戦期のグアム・サイパンに関する歴史理解を深め、平和や人権といった人類が抱える課題について学ぶことを目的として開催された。私は約1週間にわたる派遣で終始、「戦争の無い世の中を築くため、自分が、世界がどう行動すべきか」、という問いを貫き、過去に起きた戦争と現代社会の擦り合わせを行っていた。本報告書は、「平和」について自らの視点から問い直す契機となった訪問地と、そこで得た学びをまとめたものである。



富田 朱莉

## 2 グアムでの学び

### 2-1 日米対立に巻き込まれた島民の暮らしの実態—太平洋戦争記念館—

太平洋戦争記念館は、アメリカ政府によってグアム島で収集された第二次世界大戦前後の資料や遺品が数多く展示されている施設である。私たち派遣団がグアムに到着して一番初めに訪れたのがこの太平洋戦争記念館だったが、私はこの場所で派遣早々衝撃を受けた。アメリカ目線で語られる日本のグアム島支配の様子は日本のメディアで触られるそれと大きく異なっていたからだ。

記念館の展示では、米国が日本のグアム島侵攻を許した約3年の間に、島民がいかに不遇な暮らしを強いられたか、洗脳、虐待、レイプなど日本人による非行の数々が島民の証言によってありありと語られていた。また、米国はグアムを「守る側」であり、グアム島民も米国による支配を歓迎している、という前提で第二次世界大戦を捉えている。もちろん、日本がグアム島を侵攻し島民の行動や思想を支配した歴史から決して目を背けてはいけない。しかし、日本にとってグアム島が戦略的な要所だったのと同じように、米国にとってもグアム島はアジア進出の戦略的要所であったことに変わりはない。日米両国にとって「不動産」に過ぎなかったグアム島の主権は果たしてどこにあるのか、結果として戦争に巻き込まれることとなった人々の暮らしや思いに目を向けたいと感じさせる訪問だった。

### 2-2 グアム在住の若者が考える、歴史を学ぶ意義—グアム大学—

グアム大学生との交流では歴史を学ぶ意義を今一度考え直すことができた。あるグアム大学生は実体験から、「戦争における加害者側は自分たちが加害した過去を忘れやすい、または知り得ない」ことを指摘した。加害者の歴史は国内のメディアからは淘汰される傾向が強く伝承されにくい。そのため歴史を学び、特に自らが加害者側であった過去については注意深く目を向ける必要があるという。



(写真1) ディスカッションの様子

第二次世界大戦から約80年という月日が流れた今日、戦争を経験した人から直接戦争体験を聞くことは容易ではない。しかし、今を生きる若者が過去に起きた戦争をどう捉え、何を感じているのか知る機会が多く残されている。若者同士が言語の垣根を乗り越え、辛い歴史を繰り返さないため歴史を再認識する機会が必要だと強く感じた。





(写真2) 慰霊公苑で黙とうを捧げた様子

### 【講話メモ】グアム日本人会前会長 青木氏が伝えた次世代への思い

派遣団が献花と黙とうを捧げた南太平洋戦没者慰霊公苑の管理を長年行われている青木氏は、人類が人種や宗教などあらゆる違いを乗り越えて平和な世の中を実現することは可能である、と繰り返す。

グアムでは、「忘れないが、許す」という理念のもと、チャモロ人やアメリカからの移民だけでなく、日本人をはじめ、韓国人、フィリピン人など様々なルーツを持つ複雑な民族が多く共存しているという。過去の歴史と向き合って許し合う心を持ち合い、未来のために何ができるか模索することこそが平和な世の中を実現する第一歩となる。特に現代社会を生きる若者にはグローバル規模で人と人の繋がりを大切にしてほしい、と述べる青木氏の言葉に身が引き締まる思いだった。

## 3 サイパンでの学び

### 3-1 委任統治下の産業と人々の暮らし

#### —シュガーキングパーク・北マリアナ諸島歴史文化博物館—

サイパン島は複雑な統治の歴史を持つ。近現代以降は北マリアナ諸島の一部として各国の支配拡大の戦略的拠点として重要視され、ドイツ、日本、米国による統治が続いた。日本による支配は約30年間に及び、その間サイパン島のあらゆる文化は「日本化」された。「日本化された」と聞くと、「日本文化の受け入れを強要された」と理解されがちだ。しかし、日本統治時代に人々は本当に不幸な思いだけをしていたのか、派遣で訪れたシュガーキングパークや北マリアナ諸島歴史文化博物館での数多くの記録が、私の疑問にヒントを与えてくれた。

日本による委任統治時代、サイパン島のあらゆる産業を発展させた立役者として知られているのが松江春次氏（1876-1954）である。彼は南洋興発（株）を設立し、サイパン全土において大規模なプランテーション経営を実施し製糖業を中心に多くの事業を成功させた。これにより、多くの雇用が生まれ、当然その恩恵は現地島民にも享受された。彼は「砂糖王」と「シュガーキング」として現地の人々からも慕われたという。その証としてシュガーキングパーク（日本統治時代には「彩帆公園」と呼ばれた）には彼の銅像が建つ。また公園には、島全土から収穫したサトウキビを運ぶ列車の一部も展示されていた。当時多くが未墾の地であったサイパン島に線路が張り巡らされ、製糖業を一大産業として経済発展を成し遂げた活気ある島の様子が目に映るようだった。

日本統治によって経済開発に成功したサイパン島は日本や沖縄、朝鮮からの移民を急激に増やしていた。日本統治時代の「南洋庁サイパン病院」の跡地に竣工した北マリアナ諸島歴史文化博物館では、当時の様子を資料で確認することができる。当時のサイパン島中心地は、日本からの移民が集住していたこともあり、昭和前期の日本の街並みとそっくりである。館内の展示を見進めると、人々

の生活様式も日本式へ変化したことが見て取れる。特に現地島民の子ども達が通う「公学校」では、拝殿で天皇に毎朝敬礼する習慣を撮影した写真も残っていた。天皇を崇拜する文化を持たない島民の子ども達はその精神を植え付けられる様子に複雑な思いを抱いたが、日本式の教育が子ども達に与えた影響は必ずしも悪い影響だけでなかったと当時公学校に通っていたSablan氏は語っている（「【講話メモ】戦争体験者David Sablan氏の記憶」を参照）。

シュガーキングパーク、北マリアナ諸島歴史文化博物館を訪問し、大戦前のサイパンの産業や人々の生活に関して解像度が高まった。南洋興発（株）の事業の発達や南洋庁の施策により、多くの人の生活水準が向上したものの、当時軍国主義を掲げていた日本による委任統治は、子供を含む多くの人々の生活やアイデンティティそのものを変化させてしまうものだった。暮らし向きは豊かとなったとしても、結果としてサイパン島に暮らすあらゆる人々を巻き込む形で第二次世界大戦へと突き進むこととなる歴史を創り出した過去に目を背けてはいけない。

### 3-2 玉砕戦の末路—バンザイクリフ・バナデロ・スーサイドクリフ—

第二次世界大戦のさなか、多くの民衆や日本兵が北進する米兵から逃れた末亡くなった戦跡地が、サイパン島の北端に数多く存在する。それぞれの場所で人々がどのように亡くなったか、現地ガイドの方が丁寧に解説して下さった。右はいくつかの戦跡の写真（筆者撮影）とその解説である。

サイパン戦で亡くなった民間人や兵士は艦砲射撃や地上戦の犠牲の他、多くが自決によって亡くなっている。事実当時の米兵は一般市民を助けるため幾度となく降伏を促したというが、ほとんどの者が聞く耳を持たなかったという。これは、当時の日本が声高に主張していた、「降伏は恥」という理念のもとであった。この理念は日本や沖縄、朝鮮出身者をはじめ、日本式の教育を受けた現地島民にも根付いたものだった（「【講話メモ】戦争体験者David Sablan氏の記憶」を参照）。

私を含め多くの現代日本人が理解できないであろうこの感覚に囚われた人々はどのような思いで最期を迎えたのだろう。サイパンの戦跡地や罪のない人々が亡くなった現場を訪れると、人はどこで道を間違えてしまったのか、事態を改善させる方法は無かったのか、やるせない思いが込み上げる。

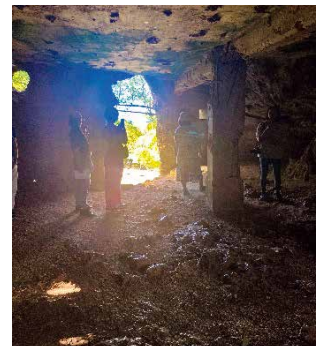
#### 【講話メモ】戦争体験者David Sablan氏の記憶

David Sablan氏（1932-）は日本によるサイパン委任統治時代にチャモロ人両親との間に生まれ、12歳の時太平洋戦争を経験し、そして生き延びた一人だ。彼による講話では子供時代に受けた「日本化」された教育の実態や戦争を体験して感じた赤裸々な思いを語って下さった。

まず、公学校では、日本語やそろばん、農業の授業の他、毎朝7時には日本旗を掲げ、日本がある（天皇のいる）北の方角に向かって最敬礼する習慣があったそうだ。また、体操や神社の清掃（シュガーキングパーク近くの彩帆香取神社の清掃）も習慣的に行っていたという。彼は私たちに向かって笑顔でこう言った。



（写真3）バンザイクリフ（写真右側）自決する人々が「天皇陛下万歳」と叫び飛び降りたことから、「バンザイクリフ」と呼ばれる。約 2,000 人が自決した場所。崖は低く、ほとんどが失血死やサメによる攻撃で亡くなった。



（写真4）バナデロ・トーチカ内部トーチカ（攻撃から身を守るコンクリート製の防御陣地）の内部は約 20 m。米軍からの艦砲射撃によってトーチカを砲弾が貫通し、子どもを含む多くの人々が即死したという。（写真中央の穴は艦砲射撃の弾跡）バナデロのトーチカの存在は捕虜となった日本兵から聞き出された。



（写真5）スーサイドクリフ近くに建立された「マリア観音像」200mの高さをもつスーサイドクリフから自決した人々は皆助からなかった。

サイパン高等女学校の生徒達も若くしてこの地で亡くなる。彼女達をはじめ足が竦み飛び降りることのできない人は手りゅう弾で自決したという。「マリア観音像」は、宗教などあらゆる差異を乗り越えて地球の恒久平和を願う思いを込め、キリスト教と仏教のデザインをどちらも盛り込んだデザインで崖の傍らに建立された。



(写真 6) Sablan 氏（前列中央）と派遣団。

「私は日本が大好きです。そして尊敬しています。」

丈夫な身体づくりと健全な精神の育成をモットーとして過ごした公学校での5年間で、彼の長生きの秘訣であるとも伺った。「日本化」を強いられた人にとって日本の委任統治時代の生活が決して「苦痛」のみを残したのではないと知り、救われる思いであった。

米軍のサイパン島上陸が始まるとSablan氏の生活は一転したという。Sablan氏の父に連れられ米軍から逃げ惑う日々が続く。Sablan氏本人は公学校で教わった「捕虜は恥」の理念により最後は自決するつもりだったという。しかし、家族を守りたい一心の父の勇気により米兵を前にして降伏し家族は戦争を生き延びたのだ。

現在Sablan氏は地上戦の舞台で生き延びた民間人の一人として戦争の恐ろしさを発信し、武力でなく「対話」によって相手を理解することが重要であることを後世に伝える活動を厭わない。私は彼が伝えたメッセージを胸に刻み、戦争体験者が当時何を感じていたのか、より多くの他者に伝えることで、平和を希求する世の中の創造に貢献したいと強く感じた。

#### 4 おわりに

本派遣では、第二次世界大戦の悲惨な歴史を伝える多くの場所に訪れることで、グアム・サイパンという激戦の地で果たして何が起こっていたのか、「平和」の意味とは何か、改めて身をもって学ぶことができた。

私が派遣の開始当初から常に抱いていたのは、「戦争の無い世の中を築くため、自分が、世界がどう行動すべきか」という問いであった。この問いに対しては、戦争がもたらす恐怖を世界中の人々が責任を持って記憶し、国境を越えてより多くの他者に伝承、そして対話によって相手を理解する努力を続けることが必要である、と結論付けたい。もちろん私もその一人であり続けるつもりだ。

しかし、何よりも大切なのは、いつ何時でも平和を希求するための問いを立て、それに対し自問自答する瞬間そのものである。今回の派遣での問いも答えを出して終えるのではなく、問いや答えの形を変えながら常に考え続けるその姿勢こそ大切にしたい。世界大戦が終結して約80年という月日が流れた今、世界各地で紛争は絶えず多くの人々が恐怖と欠乏に苦しんでいる。今なお私たちに重くのしかかっている課題から決して目を背けず考え続けたい。

最後に、本派遣を実施して下さった千代田区役所の方々をはじめ、地球市民講座でご指導いただいた今泉裕美子教授、岡部恭子様、若杉正人様、現地での研修の際にお世話になった青木一美様やDavid Sablan様、多くのガイドの方々に厚く御礼申し上げます、感謝の意を表します。



# サイパンに残る戦争の記憶 ～サイパンの戦いの概要～

## 1 はじめに

私はグアム・サイパン国際交流体験ツアーに参加して良かったと本当に感じている。文化や歴史について学ぶことができただけでなく、自分自身に向き合う時間を取ることができて、成長できる学びや気づき、そしてかけがえのない経験を沢山得ることができたからだ。本書では、私自身が実際にアメリカ視点から見て学んだ知見や感じたことを、私なりに述べていきたいと思う。

## 2 感想

私が本ツアーで学んだことの1つ目は、余裕を持つことの大切さだ。グアム・サイパンに行ったことで気づけたのは、東京にいるときの自分はとても余裕を持てていなかったということだ。現地に行って大きく感じた日本との違いの一つは、時間の流れの違いだ。現地では時間の流れが圧倒的に異なり、東京ではせわしなく過ぎていく時間も、グアム・サイパンではゆっくりと感じて、自然と心の余裕を持つことができた。東京にいるときは、やるべきこと・やらなければいけないこと・やりたいことが上手くこなせておらず、キャパオーバーになっている自分がいた。大学生活やアルバイトなど、その他にも多数の責任がある仕事があり、ありがたいことに忙しい日々を送っていた。はじめはやりたくてやっていたことも、全く自分が思うようにはいなくて、すごく悩んでいた。自分の時間を犠牲にすることで、やっとすべて完了するというようなことばかりが続いていて、結構心の中では限界が来ていたのだと思う。そのため東京に居たときは、睡眠時間ですらちゃんと確保できておらず、自分のやりたいと思っていることになかなか時間を割くことができないでいた。

そんな日々を過ごしていくうちに、自分は本当は何がやりたかったのだろう、健康を侵してまでやっている意味はあるのだろうかとずっと考えるようになってしまっていた。サイパンの戦争体験者であるデイビッド・サブランさんも仰っていた、健康が1番大事で、心も体も元気でない健康であるとは言えない。この言葉は、何でもがむしゃらに頑張ってしまう自己犠牲な面がある私にとって、すごく求めているありがたい言葉だと感じた。時間の余裕、心の余裕、経済的な余裕など、ゆとりがあってこそ健康に繋がると思うので、資本である自分の体に対する健康意識は常に大切にしていきたい。

学んだことの2つ目は、海外と日本の対比はいくらでもすべきということだ。日本は良い意味でキッチリしていると言える。それは諸外国にも良い影響になっていて、例えば電車やバスは定刻に来るのが普通で、お店に行けば定員とお客という構図があって、おもてなしの精神やルールを大切にするなどの文化や価値観だ。しかし、海外に行った途端、当たり前前に感じていた文化は当たり前ではなくて、むしろ日本の良くないところも沢山見つけることができた。



中島 悠希

平和のためと言って、客観的な視点を大事にしようとするのであれば、自分がまず自国の文化や価値観に囚われず、一歩踏み出して、何もかも異なる新しい世界に挑戦するべきだと思った。現地の人や海外に挑戦して活躍している人たちの話を聞くと、借金してでも若いうちに海外に行った方がいいとアドバイスをくださる。私も本当にそうだと思っていて、日本というコンフォートゾーンから出なければわからない、海外の視点を学ぶことができるからだ。戦争についてだけでなく、文化や価値観は現地に行くことによって何倍も学びを吸収することができると思う。

また、この国際交流体験ツアーはすごく私の中で自分を見つめなおす期間にもなり、やっと自分が本当にやりたかった「戦争についての学び」ができた貴重な機会であった。私は、戦争というテーマを学びたいと思った若者が集まって、平和という目標に向かって議論できる場がずっと欲しかった。同世代は戦争というテーマよりも、最新のカルチャーやエンタメ・SNSなどに興味関心がある。人は自由を奪われることは嫌いである。そのため、興味を持ってないテーマに関して学びや理解を強要されるのは辛いことであるともわかっている。加えて、日本から見た戦争の記憶は、敗北という過去がネガティブにさせてしまっている。だからこそ、若者だけに問わず、目を背けられがちで、なによりも、他のことで手一杯になってしまっているのが現状だと考える。

過去を振り返るよりも、未来に向かって努力したいと思うバイアスは誰しも共通だからこそ、日本という国全体が、戦争という過去を未来思考で捉えることができるように、私自身小さなことからでも行動を続けていきたい。そして、今回現地に行ってみつけた戦争というテーマに溢れる課題を、私の中でより具体的に細分化して、より戦争に対する学びを続けていきたいと思った。国際交流体験ツアーを終えて、戦争に対する価値観が変わり、日本の視点からだけ見ても平和に繋がらないという学びを得ることができた。以下は、アメリカ視点のサイパンの戦いの概要になるが、違いを受け入れて認めることが学びに繋がると考える。

### 3 戦いの始まり

1944年のサイパンの夏、第二次世界大戦の壮絶な決戦が繰り広げられた。第一次世界大戦後、日本はサイパンを始めとするドイツ領を譲り受けた。日本の植民地統治のもと、サイパンの農業は大きな発展を遂げ、国際的な成功を収めるも、日本の統帥機関は人口増加に伴い、本土の天然資源や領土が不足することを懸念していた。

そこで、日本は資源を求め、軍事行為を通じ、近隣諸国に侵攻を開始した。日本の侵攻に反発した米国は、金属スクラップや原油などの輸出を禁じた。そのため、より燃料や資源を調達するには、日本はさらに南方を侵攻せざるを得

ない状況となった。一方で、本土に燃料や資源を調達するには、日本は米国領フィリピンの貿易ルートを通過する必要があった。よって、この計画を実施するためには、米国海軍を真珠湾（パールハーバー アメリカ合衆国ハワイ州）で引き留めておく必要もあった。

真珠湾は太平洋における米国勢力の中心部だった。1941年12月7日、日本による奇襲攻撃が行われる。結果、米国艦隊は損傷し、真珠湾の浅瀬に沈没した。この真珠湾攻撃勝利は日本軍に自信を与え、日本は守備が手薄なフィリピンやグアム、ウェーク島などを攻撃していくこととなる。

サイパンの歴史は、第一次世界大戦後の日本による植民地支配から始まり、農業などが発展し国際的な成功を収めた。しかし、日本の統帥機関は人口増加と資源不足に対する懸念から、南進政策を推進していった。この過程で、「日本は極めて残虐な手段を用いて近隣諸国に侵攻して利益を得ようとした」。この表現は、アメリカンメモリアルパークで語られているもので、アメリカ視点であると言える。しかし、敗北してしまった日本では、まるで自分だけが被害を受けたというように表現されてしまいがちだが、どちらも勝利のために手段を選ばなかったという客観的観点から、死者を多く出している両国はともに容赦のない戦闘を繰り返していたと言える。

真珠湾攻撃を契機に米国との摩擦が激化し、日本はさらなる南進を余儀なくされてしまった。真珠湾攻撃により米国は宣戦布告し、太平洋戦争が勃発。米軍は工場生産を加速させつつ、南洋諸島を経てついにマリアナ諸島に到達した。米国の戦略家はサイパンの重要性を知っていた。米国はB29爆撃機で日本を空から打撃することを考えたが、B29に搭載できる燃料では、攻撃圏が片道1,500マイル（約2,414km）に限られていた。よってサイパンであれば、日本を空爆圏内に収めることができ、地形も滑走路に適していることがわかっていった。サイパンはB29爆撃機の運用が可能な地であり、日本本土への空爆を実現できるといった、アメリカにとっては優良の必ず抑えておきたい場所であった。そのため、サイパンを攻略できれば、日本の本土を意のままに打撃することができた。米軍を唯一阻むのは、サイパンを守る3万の日本軍だけであった。日本軍もサイパンの戦略的重要性を認識しており、この島を陥落させまいと決意を固めていたサイパンには、日本軍の他、現地人であるチャモロ人、日本人や沖縄人、韓国人がともに暮らしていた。よってこれが、長期に渡る複雑な南洋諸島侵攻の幕開けとなる。

## 4 サイパンの足跡

サイパンに残る日本の歴史は、第二次世界大戦の影響が大きい。1944年、サイパンは激しい戦闘が繰り広げられた場所であり、日本軍とアメリカ軍の間で激しい戦闘が行われた。この戦いは、太平洋戦争の中で重要な転換点であっ





この写真は、私が1番印象に残っている戦争経験者デビッド・サブラン氏と、広島に原爆を投下した B29 のパイロット：ポールティベッツ氏の写真である。英雄とされている彼の笑みをどう思うか？

た。この壮絶な戦いと多様な共同体が混在する状況が、サイパンの歴史の一部となっている。

サイパンの戦いにおいて、日本軍は数多くの犠牲を払い、島はアメリカ軍に占領された。サイパンの戦いによる日本の敗北が、B29による広島に原爆投下に繋がってしまった。その後のサイパンはアメリカの占領下におかれ、アメリカの文化や統治が導入されることになる。この歴史的な出来事は、サイパンの地域社会や文化に深い影響を与え、戦争の痕跡が今もなお存在する。

サイパンにおける日本の歴史は、主に第二次世界大戦の戦場としての記憶と、その後のアメリカの占領と文化的変遷という二つの主要な側面で構成されている。

1944年のサイパンの戦いは、日本にとっては壊滅的な敗北であり、太平洋戦争の転換点となった。サイパンの占領は、アメリカにとっても太平洋戦争の進行において重要なステップであり、その後の戦局に影響を与えた。アメリカの占領後、サイパンはアメリカの支配下に入り、アメリカの文化やルールが導入されていった。これにより、日本の文化とアメリカの文化が交わり、独自の複合文化が形成されることになる。また、サイパンはアメリカ合衆国の自治領としての地位を持つようになり、その影響下での発展が始まっていった。アメリカの行政下に置かれたことで、島のインフラや生活様式がサイパンの中で大きく変わっていった。例えば、島内にはアメリカ軍の基地跡や飛行場が残り、これらは現在の観光地としても知られている。同時に、アメリカ文化の導入により、英語が公用語として使われ、アメリカ式の教育制度や法律が根付いている。

そして戦争の痕跡として、サイパンには日本の戦争時の遺構や記念碑が残っている。これらは、戦争の歴史を記念し、犠牲者に哀悼の意を示す場となっている。また、地元の人々や観光客が訪れる場所としても機能しており、歴史と現在が交錯する複雑な場所でもある。サイパンの歴史を探ることは、戦争の影響が及んだ地域社会や文化の深層を理解する一助となると考える。また、サイパンには第二次世界大戦の歴史的な遺産も息づいていて、激戦の痕跡は今もなお残り、島の各所には戦争中の塹壕や砲台、そして日本兵の遺骨が埋葬された戦跡墓地が存在している。

これらは現在、戦争の歴史と被害者への追悼の場となっており、サイパンの歴史を理解することで、戦争の影響が及んだ地域社会や文化の変遷を知ることができる。そして、サイパンには日本の歴史的な建造物や遺構も存在する。日本統治時代の影響を感じさせる石垣や寺院、戦争記念碑が島内に広がり、これらは日本の歴史と文化がサイパンに刻まれた証でもある。こういった複雑な歴史的背景を知ること、サイパンは単なる観光地だけでなく、日本とアメリカの歴史的交流や戦争の影響が交錯した場所として理解されることを願う。

# グアム・サイパンを訪れて

## 1 はじめに

私は、この派遣を通して歴史を多角的な視点で捉え、そのうえでこのグアム・サイパン戦を抽象的に表現できるようになることが目標だった。つまり、今まで浅い知識しか持たず「軍国主義的な政治の体制は長くもたない上に人命を多く失うことになるため良くない」くらいに曖昧だった自分の意見を、自分なりの捉え方ではっきりと確立したものにしたいと考えていた。しかしグアム・サイパンから帰ってきて、行く前より豊富な知識が得られた今も、私は未だこの戦争を的確にかつ簡潔に表現することができないでいる。

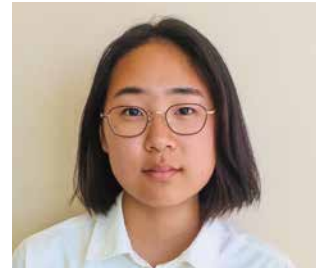
## 2 印象に残った施設について

### 2-1 バンザイクリフ・スーサイドクリフ

サイパン島で一番有名な戦跡といえば、このバンザイクリフではないだろうか。ここバンザイクリフはサイパン島の北端に位置し、南から迫る米軍に北へ北へと追い詰められた日本人たちが、最後に辿り着いた場所である。後ろにもう逃げ場はなく、日本軍の「生きて虜囚の辱めを受けず」という言葉に従った人々は、サイパンで最も日本に近いこの崖から、「天皇陛下万歳」と叫んで身を投げた。しかしバンザイクリフは80mほどの高さしかないため、多くの人には死にきれず、死因で最も多かったのは溺死だったそうだ。沢山の人の血で辺りは赤く染まり、その匂いを嗅ぎつけて鯨がやってきて、その鯨に喰われて亡くなった人もいたという。

バンザイクリフの次に有名な場所と言えばスーサイドクリフだろう。ここはバンザイクリフの少し手前にあるマッピ山の北側の断崖である。日本兵や民間人が、バンザイクリフと同じく逃げ場を失ってここから飛び降りたことからスーサイドクリフと呼ばれるようになった。200m以上ある高さの崖のため、身を投げた人は皆即死だった。飛び降りる決心のつかない人は、手榴弾で自決をしたそうだ。崖の上の端から下をのぞくと、手すりがあっても恐怖で足がすくんでしまう。当時ここまで逃げてきてこれ以上は逃げる場所がない、ここで死ぬしかないと思った人達の気持ちは、我々では到底知ることもできないほど辛く苦しいものだったのだろう。

スーサイドクリフを下から見ると、穴のようなものが沢山あいているのが見て取れる。これは米軍の艦砲射撃の跡だそうだ。それを初めて聞いた際は、当たり前のことながら、ここでかつて実際に戦争があったのだということを実感し、当時の激しい戦闘に巻き込まれた人々の心情を思い、衝撃を受けずにはいられなかった。



西崎 瑞穂





バンザイクリフ・スーサイドクリフでは、多くの日本人が米軍の捕虜になることを怖れて自決した。しかし、本当の米軍はどうだったのだろうか。

実際の彼らは、多くの場合“鬼畜”などではなかった。彼らの捕虜の扱いは人道にのっとったものが多く、民間人を率いていた日本の軍人（大場栄大尉）が、自分達のところにいるよりも米軍の捕虜になった方が良いと判断して、民間人達を引き渡したこともあったようである。そんな中で起こったこの出来事は、あまりにも悲しく感じられて、どうにか回避できなかったのかと心が重くなった。

確かに敵国の軍に投降するという事は、敵の支配下に置かれるということだ。いくら国際法があるとはいえ、敗戦国の人々の扱いが人道にのっとったものになるかどうか、確証は得られない。更に当時の人々の間には先述の通り日本軍の戦陣訓やプロパガンダが浸透しており、様々な噂が飛び交っていた。それに抗って、敵の軍門に下るというのは簡単なことではないだろう。米軍もその対策として、日本語で「抵抗せずに出てきてください、我々はあなたたちに危害を加えない」等の趣旨の呼びかけを行ったりビラを配ったり、スピーカーで日本の歌を流したりと様々な活動を行ったが、結局これだけの死者が出てしまった。この問題は、当時の日本人の恐怖心と国・天皇への忠誠心、そして軍部の軍国主義的な体制等が原因となっており、私の思考は、解決が非常に難しいという結論に帰結してしまった。

また現代においては、日本は敗戦を経て民主主義国家となっているため、もし万が一また戦争が起こり日本人が降伏か自決かの選択肢を迫られた場合は、太平洋戦争時よりは自決をする人の割合は減少すると思うが、完全になくすとはできないかもしれないと、私は立ち並ぶ慰霊碑を見ながら思った。

## 2-2 シュガーキングパーク



私は、植民地支配をされる側の人々が感じるものは皆同じ負の感情だと思っていた。そこに自分たちが前から暮らしていたのに、急に後から来た人々が自分たちを支配しだせば、不満に思うに違いない。どんなにその土地を発展させようと、支配下に置かれた人々は被害者だろう。だからきっと、太平洋戦争が始まる前の日本統治時代から、サイパンの人々は日本が嫌いだったのだろうと。

しかし、シュガーキングパークに訪れてみて、私の考えは変わった。シュガーキングこと松江春次氏は日本人にしてサイパンの産業を大きく発展させ、島の生活水準の向上に貢献し島民から感謝されている人物だったのだ。「シュ



ゲーキング」という二つ名も、島民から親しみを込めて呼ばれていたもので、この松江春次氏の像も、彼が活着している間につくられたそうだ。サイパン戦においては、「松江春次氏の像を傷つけると島民からの反感を買うのでこの像は破壊するな」という命令が出るほどであった。現地の資料館では、島民の日本への印象について、「昔の（戦前の）日本人は優しくて好きだった」というような証言も展示されており、必ずしも統治する側とされる側で対立が生まれるわけではないということを知ることができた。

このような、互いに利益があって成り立った統治のあり方は、今までの固定観念を塗り替えるもので、私にとってとても印象深く残った。

### 2-3 アメリカンメモリアルパーク

アメリカンメモリアルパークのビジターセンターでは、太平洋戦争に関する詳細な資料を沢山見ることができた。当時戦争を経験した人々の証言集も豊富にあったため、リアルな意見を知ることができたのは、とても貴重な体験だったと思う。

そして、パーク内で特に印象に残ったものは、島民の犠牲者の慰霊碑である。碑に刻まれた名前の横の数字が亡くなった時の年齢になっていた。この数字を見ていくと、1歳や2歳でまだ生まれたばかりの幼児などの小さい子供が多いことに気が付く。戦闘に巻き込まれたのか、またはそれ以外か、詳しいことはわからないが、自分で自分の身を守ることができない子供は生き延びる可能性が低くなる。本来戦争になれば民間人は避難して巻き込まれないようにするのが普通だが、太平洋戦争において絶対国防圏に入っていたこの地では、それは許されなかった。一部の日本人は船で日本へ逃げたが、それ以外の日本人・現地人は島に残って米軍の侵攻を受け、多くの人々が犠牲になった。その犠牲者に含まれてしまった子供の恐怖は、そしてその父母の悲しみ、無念はどれ程だったのだろうか。



### 2-4 南太平洋戦没者慰霊公苑

南太平洋戦没者慰霊公苑では、グアム日本人会の前会長、青木さんにご案内いただき、慰霊塔にて献花した。

私が驚いたのは、この公苑に併設されている平和寺という建物だ。「寺」と名付けられてはいるものの、実際は宗教の垣根をこえてどんな人でも祈りを捧げられる場所である。ここにはあらゆる宗教の人々が各々持ち込んだ物が沢山置いてあり、その景色は一見まとまりがないように思えても、故人の冥福と未



来への平和を願いこの景色が作られたという過程を想えば、建物全体が一つとなって同じ願いのために存在しているという一体感があつた。

### 3 おわりに



グアム・サイパンでは、確かに太平洋戦争について様々な立場の視点から沢山の知識が得られた。しかし反対に、知識が増えれば増えるほど考えがまとまらなくなるのだ。それは、戦争というものの複雑さが原因と言えるだろう。戦争は単なるボードゲームのようなものではない。世界という広大な土地が舞台となり、その上で沢山の人々がそれぞれ考え、感じ、行動し、そのすべてがつながって状況が変わっていく。その一つ一つを追っていきすべてを知ることが、究極的には歴史を理解したと言えるのだと私は思う。だがこれは一人の人間が成し遂げることは不可能だ。だから私たちのように歴史を学ぼうとする人間は苦勞するのだと思う。断片的にしか歴史を知ることができない私たちは、その限られた情報を精一杯駆使して全体を見通す努力をしなければならないのだ。

以前、太平洋戦争について軽く学んだ際は、一つの視点からの取捨選択された簡潔でわかりやすい情報のみでしか知識を得られていなかったため、浅い学びではあるがそのかわり一言でこの戦争を簡単にまとめることができた。今回の派遣で知識が増えた私は、様々な歴史の解釈に苦しむこととなり、かつての目標であったこの戦争を抽象的に表現すること、自分なりの捉え方を見つけることを達成できなかったということにはなる。しかし、その努力をし、達成に数歩は近づくことができた。私は、それが人間として歴史を学ぶことであると考える、これからもその努力を怠らないようにするべきであると思う。

# グアム・サイパンを訪れて感じたこと

## 1 はじめに

令和5年度の国際交流体験ツアーは、グアム、サイパンでの、第二次世界大戦期に関する歴史の学習を目的として行われた。グアムでは、太平洋戦争記念館、ラッテストーン公園、スペイン広場、南太平洋戦没者慰霊公苑、ガンポイントなどを見学・訪問し、サイパンでは、日本刑務所跡、シュガーキングパーク、北マリアナ諸島歴史文化博物館、バンザイクリフ、ラストコマンドポスト、中部太平洋戦没者慰霊碑、スーサイドクリフ、そしてアメリカンメモリアルパークなどを見学・訪問した。そのほか、グアム大学の学生との交流や、グアム日本人会前会長の青木さん、そして戦争当時のサイパン島で生活したDavid・Sablanさんとの講話の機会を頂いた。

本報告書では、数々の訪問地の中から、特に印象に残ったスーサイドクリフとアメリカンメモリアルパークの2つを取り上げ、学習した内容も踏まえながら、訪問先で学んだことと私の所感を述べたい。

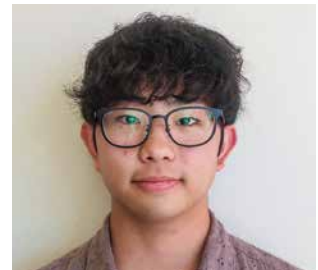
## 2 スーサイドクリフを訪れて

スーサイドクリフは、太平洋の孤島、サイパンに位置し、第二次世界大戦中に行われたサイパンの戦いの舞台として広く知られている。崖が断崖絶壁となつてそびえ立つスーサイドクリフは、その名が物語る通り、多くの日本人が自決した場所である。多くの日本人が、進撃するアメリカ軍に対抗する手段を失い、敗北の苦しみに直面していた。スーサイドクリフは、彼らが最後の決断を下した場所であり、多くの者がここで命を絶った。訪れる者は、この場所で起きた戦争の悲劇に思いを馳せ、亡くなった者たちへの哀悼の念を捧げる。このように、スーサイドクリフはサイパンの歴史において重要な場所として残っている。

私たちは、中部太平洋戦没者慰霊碑を訪れて、献花を行った。屏風を模した意匠を凝らした石板の背後には、スーサイドクリフの断崖が屹立している。見上げると、アメリカ軍の兵器が峭壁に刻んだ弾痕が、今もなお強烈に残っていた。当時周辺にいた人々が、崖に弾丸が撃ち込まれる様子を見て、その威力を実感し、死を感じたのだろうかと思案すると、戦争の悲惨さと、絶望とが感じられた。

## 3 アメリカンメモリアルパークを訪れて

アメリカンメモリアルパークは、無数の犠牲者たちを追悼するために、かつての激戦地であったその地に建てられた。敷地内のビジターセンターには、アメリカ軍によるサイパン島への侵攻、サイパン島占領後の日本本土空



星野 祐二郎



スーサイドクリフの断崖  
いたるところに銃撃の跡が残っている。



頂上までの道中  
頂上にバスに向かって途中、こ  
こら一帯は当時道もなく、舗装もさ  
れていない状態で、緑が生い茂って  
いたと、ガイドの方から説明を受け  
た。アメリカ兵に捕まっていけない  
、捕まると酷いことをされると、  
怯えながら頂上を目指し、大変な思  
いでたどり着いたのち、最終的に自  
決に至る。この過程と結果の全てに  
、筆舌に尽くしがたい悲しみが溢れ  
ており、二度と起きてはならないと強  
く思った。



スーサイドクリフの頂上  
頂上から、眼下に広がる景色を一望  
してみると、その目のくらむような  
高さがわかると共に、周りに遮るも  
ののない、自由な風が感じられた。  
実際に訪れると、ここから身を投じ  
る恐怖が想像できる。当時の人々は  
、視界の先で落ちていく人々を見て  
、何を思ったのだろうか。





米軍によるサイパン島への上陸の様子  
米軍の圧倒的物量に関する説明や、  
米軍の上陸時の写真が展示されて  
いる。

襲に関する各種の展示がある。アメリカ軍によるマリアナ諸島攻略の意義や、ここを基地とする日本本土空襲が、アメリカの対日戦勝利に必要なだった事を説明することが目的となっている。

### 設置されていた手記やさまざまな記述を読んで

私が当時の惨状を、一番印象深く感じられた瞬間は、ビジターセンター内の、各展示物の前に設置されている戦争体験者や英霊たちの記述を拝読した時だろう。そこには、日本人、アメリカ人、そして現地人の言葉が残されていた。現地人による記述と、アメリカ人による記述は、元の記述の下に、自然な口調に日本語訳された文章が載っており、英語が苦手な方も、読めるようになっていた。

それらには、文字通り戦火に包まれたサイパンの地での体験が綴られていた。砲火の轟音の恐怖や、無慈悲な戦場での生死など、その言葉からは、戦争の現実と苦悩の深さがこぼれることなく残っていた。

今回は、特に印象に残った4つの記述を紹介し、所感を述べる。

#### ①

午前5時、凄まじい敵の空中攻撃があった。やっと死ぬ場所に来たのだ。侍のように平静な態度で死ぬことを光栄に思う。海軍の援護射撃は熾烈過ぎて言葉で言い表すこともできない。今、私は一人前の戦士になれたような気がする。夕暮れにかけて爆撃は終わったように思えたが、再び夜になって先ほどと同じような爆撃が続いた。午後約5時頃、大隊本部との通信がとだえた。

<氏名不明の日本兵の日記から>

この記述が、一番強烈に残っている。この文を読み終えた時、『葉隠』という作品の、「武士道とは死ぬことと見つけたり」という有名な一節を思い出した。この言葉は、武士は、主君に対する忠誠心や、名誉を大切にし、そのためには死も辞さない覚悟を持つことが不可欠だと主張している。

氏名不明の日本兵は、死地に赴いてもなお、忠誠心を絶やすことなく、大いなるものに自己を捧げられることを光栄に感じていたのだ。私には到底できることではなく、そのような想念が生まれることもないのではないかと感じた。

#### ②

息絶えた母親の後ろに茫然として立ちつくす子供たちを見た。空腹や母の死を嘆きうめく子供たちだけが涙ぐみ、不幸に満ちた声をあげて

いるのだった。色々な形の死を見た。最終的には戦争がすべての人間を狂わせるのか。それとも自分はこの状況の下で他人の悲しみなど考えている余裕などないだけなのか。この事が戦場で生と死の狭間におかれながら考えたことである。

### <岸本ゲンニン 日本人学生>

文中の、「戦争がすべての人間を狂わせるのか」というとても悲しい疑問の言葉は、周りの人間の心が憔悴して、変貌していく過程を、実際にその場で届けてこなければ出てこないものだろう。戦場で常に不安定な状況にさらされ、極度のストレスや疲労が蓄積していく。これにより、感情のコントロールが難しくなり、他人への思いやりが後退する。無理もないことだと考える。この文章からは、多くを経験した人からの苦悩が感じられた。

### ③

僕らが洞窟に隠れたとき、食べ物が全然なくみんなが空腹をうったえていた。戦争が始まるちょっと前まで僕らは家にいて、米軍の航空機の音が聞こえた時ティップパレにある洞窟に走って逃げたんだ。そして、そこについたとき僕の家族用の穴を掘り始めたんだ。戦争中はたくさんの人が死んだ。僕の妹のマリアと母が死んでしまった。母は銃弾に撃たれて死んだんだ。米軍に殺されたのか日本軍に殺されたのかもわからない。洞窟の外にも中にもたくさんの死体があって母が死んだことにも気づけなかったんだ。

### <イエス・リスア サイパン島民>

この文章から、当時の現地人たちの悲惨な様子が想像できた。自分の家族が亡くなってしまったことにも気づけにくいくらい余裕がなかったのだと考えると、その時の恐怖は計り知れないものであっただろう。

現代で、人間の死体が周辺に転がっている状況など、余程のことがないと経験できないだろう。それを多くの人が、世界中で当たり前のように経験していた、そのような時分が存在していたのだ。

自然に覆われた島の、風化させてはいけない歴史を、この文章から改めて感じることができた。

### ④

僕が生き延びられたことは奇跡という以外言いようがない。この事実を実感するたび、逃げる途中で負傷しその後自分で命をたった学友た

ちが天国で幸せになっていることを祈るのである。

そのたびにまた涙が出てくるのだ。

＜佐藤シゲル 日本人学生＞

この文章では、実際に戦場で過酷な経験をした人の、生きていることの幸せと、亡くなった学友たちへの思いが記されている。戦場を経験したからこそ、生きる幸せを理解している。平和な世の中で当たり前過ぎてしまっている現代の人は、きっと本当の意味で平和を理解していないのだろうと、この文章から感じた。

犠牲を思い、未来の世代に平和を継承していくことが、私たちには求められている。

#### 4 最後に

グアムの戦い(Battle of Guam)、サイパンの戦い(Battle of Saipan)は、その戦争の運命と、その後の日本の国運が、最もシンクロしていた戦争であっただろう。そんな戦地で戦った英霊たちの記録や戦跡を目にして、当時の人々の心境や大義を知ることができたことは、とても貴重な体験になったと感じている。今回の国際交流体験ツアーを通じて得た貴重な学びと経験を、今後の日本、そして国際社会の発展に活かすことができるよう、今後も日々研鑽を積んでいきたい。

最後に、千代田区役所の方々、現地での研修の際にお世話になったガイドの方々、添乗員の大橋様、地球市民講座講師としてご指導いただいた今泉様、岡部様、若杉様、そして、今回のグアム・サイパン国際交流体験ツアーにご理解とご支援をいただいた千代田区民の皆様に厚く御礼申し上げます、感謝の意を表します。



# 国際交流体験ツアー（グアム・サイパン）現地報告

## 1 志望動機

私が海外事情調査団に参加を決めた理由は、「日本の戦争行為を学び、日本人としての責任を果たすため」である。かつて大東亜共栄圏を築こうと世界各地を侵攻した日本。その戦争行為で様々な人々が心に傷を負い、辛い経験をした。しかし戦後78年が経ち、日本に生きる私達は、戦争の記憶が薄れ平和ボケしている。未だに戦争の傷を負い、苦しむ人が存在する中で、私達、日本人が記憶を辿り、それを継承する責任は十分にあるはずだ。それは、過去の責任を認め、相手に謝罪の気持ちを伝えること、そして日本人自身の戦争体験も同時に共有することだと考える。この1つ1つの積み重ねを通じて互いの思いを共有し、未来の友達になるための一歩に繋げていきたい。今回の研修を通じて、国ごとの歴史の認識や伝えられ方の違いを学び、日本の外交姿勢をどう改善、構築していくべきかを自分なりに考えたいという思いから、参加を決意した。

## 2 何を学び、どう感じたのか

派遣を通じた学びとして、「客観的な視点を持つことの重要性」、「戦争教育への学び方の多様性」、「自国の歴史を学ぶことの重要性」3点について説明したい。

まず、歴史をスムーズに学ぶヒント、「客観的な視点を持つことの重要性」に関して。これは実社会で実践することが、とても難しい。なぜなら、特に戦争教育は、国ごとに自国にとって有利な見方で表現されることが多く、関係者も多岐にわたるからである。客観的視点の構築は、発行される書物や記事を比較するだけでも、国ごとに見方が異なり、なぜ国同士が対立するのかを明確にするきっかけとなると考える。具体的な例として、“広島原爆投下”に対する日米の解釈が挙げられる。原爆投下に関して日本では原爆の威力と被害が強調され、世界で唯一の被爆国として悲劇を継承する、いわば被害者目線で語られることが多い。しかし、一方で、グアム（アメリカ）の博物館では原爆投下により、日本軍の侵攻を阻止し、米軍の犠牲を最小限にとどめ、世界を平和に導いたと表現されている。アメリカは原爆投下をプラスの視点でとらえている。一つの出来事だけでも、双方、原爆に関する見方が大きく異なることがわかる。歴史を学ぶ際には、一文字一行、単なる暗記ではなく双方の視点を参考に自身の考えを築くことが重要であると知ることができた。

次に、戦争体験を身近に、自分事として捉えていくためのコツとして、戦争問題を身近なものから関連付ける方法を提案したい。戦争を無くし平和な社会



宮崎 ひな子





を築くことは全人類の課題でありながら、人類は繰り返し同様の罪を犯し憎しみと悲しみを生んでいる。それは、誰もが過去の記憶を忘れ、自分一人の力が世界を変える一歩になると気づいていないからだと考える。私達のように実際の戦地に赴くことが一番実感しやすい方法であるが、それはとても勇気のいること、そして時間とお金も必要である。戦争に関して他人事ではなく自分事として捉えるためには、いかに戦争体験を身近にしていくかが重要と考える。周囲を見渡してみることで、身近にある携帯や移動手段に用いる石油など様々なものが戦争と関連しているかもしれない。戦争の記憶は、辛く、悲しく、酷いもので誰しもが簡単に目を向けることは難しい。しかし、戦争の記憶を負の遺産ではなく平和の未来へ繋げる遺産として残していけたら、何よりもこのツアーの体験を活かせるのではないか。

最後に、自国の歴史を積極的に学んでいく姿勢の重要性について触れていきたい。日本は自国の威力を示すために様々な犠牲を生み、戦争をきっかけとして多くの国と対立を生んだ。被害を受けた側の目線に立てば、日本人が自らの歴史を振り返らない姿勢に苛立ちを覚えるかもしれない。国際社会で活躍していく前段階として、日本の戦争行為を学び、日本人としての責任を果たし、相手に寄り添う努力をしていきたい。

### 3 戦争教育における課題と解決策

今回、研修を通じて感じた、戦争教育における課題と解決策を以下それぞれ提案していきたい。

#### ・課題「海の保全と記憶の風化を抑える工夫」

～空中展望台“Fish Eye Marine Park”に学ぶ海の環境保全と戦争の記憶を継承していくためには～

#### 課 題

- ・戦争体験者の高齢化
- ・戦争の記憶が風化しつつある
- ・海ごみやトレジャーハンターの活動により海の重要な資源が破壊されている

#### 解決策

#### 「海的美術館を巡ろうin グアム・サイパン×日本」

戦争を無くし平和な社会を築くことは全人類の課題である。しかし人類は繰り返し同様の罪を犯し憎しみと悲しみを生んでいる。それは、誰もが過去の記憶を忘れ、“自分一人の力が世界を変える一歩になる”と気づいていないからである。そのためには、目を背けがちな戦争の遺産、そしてゴミで汚れた海を



私達が目で見ることが必要がある。年齢を問わず、戦争、ごみ問題、トレジャーハンターなどの海洋問題を認識してもらいたい。問題を自分事として捉えてもらいたいのだ。

今回、私は海と歴史を関連付け、海そのものを美術館に変え、環境保全と歴史の風化を防ぐ、名付けて「海の美術館を巡ろうin グアム・サイパン×日本」ツアーを提案したい。

このツアーが課題解決に効果的だと思う理由は2つある。

1つ目は、「気軽さ」である。誰も勉強と聞くと身構えてしまう。しかし、イルカやサンゴ礁、サンセットを見るついでに「歴史も学べてしまう。自然と誰もがゲーム感覚で学習者になれる工夫があれば、レジャー感覚のお客さんだけでなく修学旅行生や小さなお子様連れも呼び込めるかもしれない。お客さんはツアーで綺麗な海を見た後に、「もう一度来てみたい」「幸せな気分になった」とプラスな印象を受けるだろう。しかし、自分達の生活により二度とこの景色が見ることができなくなるとしたら、どう感じるだろうか。自分の力で少しでも変えられると気づけたなら、次はボランティアで参加してくれるかもしれない。ツアー後にツアー中に仲良くなったメンバー、チーム対抗戦でビーチのゴミを拾ったり、海ごみで作品を作ったりすれば一生記憶に残るかもしれない。

2つ目は、「海はみんなで守るもの」という認識ができるからである。美術館に行って展示品を積極的に汚す人は少ないかもしれない。海には歴史を反映する展示品があり、学びに溢れている。しかし、そこにはトレジャーハンターが居て展示品を壊してしまう。一方で彼らから美術品を守ろうとするヒーローがいることも知ってもらいたい。海を美術館にすれば、環境保全に資金を投じる人が増え、その地域が観光地となり、海が守るべき大切なものであることをより多くの人々が認識するきっかけになるかもしれない。海は人間の生活を支えてきたが、時には戦争の舞台となることもある。戦争の記憶を負の遺産としてではなく、平和な未来につながる遺産として後世に伝えていく必要がある。世界各国は、宗教、政治イデオロギー、国民の生活環境など、国家レベルで大きく異なる。すべてが異なる環境の中で、互いに同じ意見を持つことは容易ではない。しかし、たとえ政治思想が違って、平和を祈り、歴史を継承するための方策を共有することは可能だと思う。

戦争の記憶は、辛く悲しく酷いもので誰しもが簡単に目を向けることは難しい。しかし、多くの国が観光を資源とする海を舞台にイルカやサンゴ礁、サンセットを楽しみながら歴史も学び、美しい自然を守るためには戦争を無くし平和な社会を築くことが大切であると訴えられるのではないか。





戦争体験者David Sablanさんと共に



グアム現地学生と共に

このプロジェクトを通して、たった一人の学生の行動を変えることが、海洋問題、そして地球の未来を変える重要な役割を果たせることを伝えていきたい。

#### 4 最後に

戦争中、生きてくても生きられない人がいる。平和な社会で命を絶とうとする人がいる。この差はどこから生まれるのだろうか。私達は人生に、もがき苦しむ中で誰もが各々の"戦場"で戦っているのかもしれない。私は伝えたい。人が一人生きることで、誰かを、何かを変える力が生まれること。「自分は価値があり、生きていい」と気づいてもらいたい。また、相手の立場に立つ勇氣はより私たちに成長を与えてくれる。なぜ意見が合わず対立が起こるのか。自分目線だけでなく相手目線に立ってみてほしい。相手は違う見方していて、何かヒントをくれるかもしれない。私達は必要でない情報も取り入れるべきかもしれない。スマホを外に置いて人との繋がりを感じてみよう。自然と向き合い、風を感じてみる。自分の価値と向き合い、自分は世の中を“ちょっぴり”良くする力があると気づいてみる。違う場所に行けば新たな自分と出会えるチャンスが巡ってくるかもしれない。"日本人"として世界に羽ばたく前に覚えていてほしい。単なる暗記科目だった歴史、印字された一文字は沢山の犠牲と勇氣、悲しみのもので生まれ、今の私達に学びを与えてくれているのだと。

# グアム・サイパンを訪れて

## 1 はじめに

今回の海外研修を経て、今後の自分の糧となる様々な体験をすることができた。本レポートでは、グアム・サイパンを訪れて自分の考え方を改めるきっかけとなった印象深い出来事についていくつか記したいと思う。



劉 佳帆

## 2 太平洋戦争記念館を訪れて

この記念館を訪れて、アメリカと日本の描写の違いについて疑問を抱いた。それは以下の記述である。

### U.S. Control of Guam

The U.S. Naval administration on Guam made improvements in agriculture, land management, public health, and education. At the same time, the Chamorro language in public places was forbidden.

Chamorros, long used to Spanish influence, came to adapt to the Americans. By the time World War II broke out, many Chamorros considered themselves loyal to the United States.

### 米国のグアム支配

米国海軍のグアム島統治により、島の農業、土地管理、公衆衛生、教育などが向上しました。一方、公共の場でのチャモロ語の使用は禁じられ、スペインの影響を長く受けたチャモロ人は、アメリカの習慣に合わせてになりました。第二次世界大戦開始までに、チャモロ人たちは米国に忠誠心を持つようになっていました。

### Japanese Control of Mariana Islands

Under Japan's rule, the Mariana Islands north of Guam saw great improvements in public health, agriculture and the economy. On Saipan and Rota the economy thrived with the development of large sugarcane plantations and refineries. In 1937, under the "Japanization" policy, local students were taught to "be loyal to Japan." By 1939 the Japanese population of these islands was 10 times the size of the local population. When war broke out, most locals were considered loyal to Japan.

### 日本のマリアナ諸島支配

グアム島の北に位置するマリアナ諸島は日本の支配の下、公衆衛生、農業、経済において大きな発展をとげました。大規模なさとうきび農場と製糖所の発展により、サイパン島とロタ島の経済は繁栄しました。「日本化」政策の下、1937年（昭和12年）、地元の学生たちは「日本に忠誠をつくす」ように教育され、1939年（昭和14年）までに、島々の日本人の数は現地民の10倍に増えました。戦争が始まった時には、地元の人々のほとんどは日本に忠誠であったといえます。

この記述はアメリカのグアム支配と日本のマリアナ諸島支配を対比して描いている。グアムではチャモロ人は自発的にアメリカに忠誠を誓うようになったということが強調されているが、サイパンではチャモロ人たちの自発性についての言及はなく、むしろ強制的な教育によって忠誠を誓うようになったということが強調されている。もちろん、アメリカのグアム支配は強制的なもので日本のサイパン支配は全く強制性がないと主張したいのではない。ここで指摘したいのは、文化的・思想的な面だけではなく経済的な面でも支配・被支配の関係は成り立つことである。すなわち植民地の産業・経済は宗主国の都合によってカスタマイズさ

れているということだ。サイパンの製糖産業も日本の都合によって発展させられたものであり、それはグアムでアメリカが経済発展のために行ったことでも同様である。つまり、宗主国・植民地という関係性では両者は対等ではありえないのに、宗主国への現地住民の忠誠が自発的なものだったと印象付けるのは強引であると私は主張したいのである(当然それは日本が旧植民地で行ったことに対しても適用される)。この記述の違いから、歴史に対する見解は自国にとって都合の良い解釈をしがちであるのはどの国でも同じであり、一人一人が自分のいる立場を自覚することが歴史認識を少しでもフラットなものに修正するために必要不可欠なのだった。

### 3 ラッテストーン公園を訪れて

ラッテストーン公園は原語ではSenator Angel Leon Guerrero Santos Latte Stone Memorial Parkと呼ばれている。アンヘル・レオン・ゲレロ・サントス上院議員の銅像の手前にある案内板にはこのような文章が刻まれていた。

In 2003, the 27th Guam legislature renamed Latte Stone Park in Hagåtña to Senator Angel Leon Guerrero Santos Latte Stone Memorial Park. Public Law 27-44 states "the three term senator was an outspoken advocate for the rights long denied to many Chamorros because of historic injustices, and equality under the laws of the United States..." He is credited for the success of the Chamorro people's demand for return of excess federal land, and the disbursement of Chamorro Land Trust property to eligible Chamorros. Born in 1959, he died in 2003 at the age of forty-four. During his years of public service, and the Chamorro leader for indigenous rights, he frequented Latte Stone Park for inspiration, contemplation and guidance on Chamorro Human Rights.

2003年、第27期グアム議会は、ハガニアにあるラッテストーン公園を、アンヘル・レオン・ゲレロ・サントス上院議員ラッテ・ストーン記念公園に改名した。公法27-44によると、"3期務めた上院議員は、歴史的な不正によって多くのチャモロ人が長い間否定されてきた権利と、米国法の下での平等への率直な支持者であった..."。チャモロ人の、連邦政府が所有する過剰な土地の返還要求を成功させ、チャモロ・ランド・トラストの財産を正当なチャモロ人に払い戻したことでも知られる。1959年生まれ、2003年に44歳で死去。公務に従事し、先住民の権利を守るチャモロ人のリーダーであった彼は、チャモロ人の人権に関するインスピレーション、思索、指導のためにラッテ・ストーン・パークを頻りに訪れた。

"We cannot be passive or silent when human beings endure sufferings or humiliation. We must step forward and takes sides. We must assist immediately. At times, we may fall. Generations will come and generation will pass. But if no generation has the conscience, courage and the moral convictions to right the wrong doings of the past, then the next generation will have to live with the same injustices in the future."

「人間が苦しみや屈辱に耐えているとき、私たちは受け身になったり、沈黙したりすることはできない。私たちは一歩前を出て、味方にならなければならない。直ちに支援しなければならない。時には倒れることもあるでしょう。しかし、過去の過ちを正す良心、勇気、道徳的信念を持つ世代がいなければ、次の世代は将来同じ不正を背負って生きなければならない。」



私はこの文章を見て痛いところを突かれたような気がした。事前研修でグアム政府観光局の若杉正人講師、マリアナ政府観光局の岡部恭子講師、法政大学今泉裕美子教授のお三方にグアム・サイパンの歴史や文化について教えていただいたが、その講座だけで自分はグアムやサイパンについて大体は理解できたと勘違いしていたからだ。お三方に教えていただいた内容はあくまでグアム・サイパンの基本的な情報や、日本との関係に焦点が当てられた歴史であり、私が持っている知識はごくわずかなものだど気付かされた。現在は両地ともアメリカ合衆国の一部としてグアムは準州、サイパンは自治領と扱われているが、第二次世界大戦からそこに至るまでの歴史的経緯については全く知らなかった。ラッテストーン公園を訪れて初めて、チャモロの文化を守ろうとする意識をグアムの人々に根付かせるために尽力したサントス上院議員がいたということを知ることができたのだ。そして、二段落目に記されているサントス上院議員本人が残した言葉の重みについてもよく考えたいと思った。この言葉に関連して、ドイツの神学者Martin Niemöllerが残した言葉を紹介したい。

First they came for the communists and I did not speak out because I was not a communist. Then they came for the trade unionists and I did not speak out because I was not a trade unionist. Then they came for the Jews and I did not speak out because I was not a Jew. Finally, they came for me and there was no one left to speak out.

まず最初に、ナチスが共産主義者を攻撃したとき、私は声もあげなかったし、助けたりもしなかった。なぜなら、私は共産主義者ではなかったからだ。

ナチスが労働組合員たちを弾圧したとき、私は声をあげなかった。なぜなら、私は労働組合員の一人ではなかったからだ。

そして、ナチスがユダヤ人を迫害したとき、私は見て見ぬふりをした。なぜなら、私はユダヤ人ではなかったからだ。

最後に、ナチスは私を攻撃してきた。ただ、私のために声をあげるものは誰一人としていなかった。

Niemöllerは当初はアドルフ・ヒトラーの支持者であり反ユダヤ主義者であったが、ナチスの教会に対する国家管理に反対したため強制収容所に投獄されることとなった。このNiemöllerの言葉とサントス上院議員の言葉には共通している見解があるのではないだろうか。理不尽に虐げられる他者のために声を上げなければ未来は暗いということだ。他人事を自分事として捉えることは難しく、時には労力がかかることもあるだろうが、「情けは人のためならず」というように他人を尊重することは自分が尊重されるために必要な行動である。そのように一人一人が行動することが国際平和を希求するために重要なのではないかと思う。

## 4 グアム大学の学生と交流して

グアム大学の各施設をめぐりグアム大学の学生2名と談話する機会を得た。グアム出身の学生Clarさんはチャモロの伝統文化について教えてくださった。チャモロの文化を継承するためにグアムの小学校ではチャモロ語を習う時間があるそうだ。しかし、今では簡単な言葉ぐらいしか覚えていないとおっしゃっていた。グアムでは英語とチャモロ語が公用語に指定されているが、若い世代がチャモロ語を使う機会は少ないようだ。ある記事によると、1990年から2016年にかけてチャモロ語話者の数は34,598人から25,847人に減少したようだ。先住民の言語を保護する活動はさまざまな場所で行われているが、英語をしゃべれることが重要視される今日のグローバル社会では、原住言語を日常語として使用する家庭は少なく、それを継承することは困難であろう。他国の植民地とされた歴史を持つ国にとって言語交替の問題は身近なものだが、総

人口1.3億人を抱える日本にとっても全く無関係なものではないことを忘れないようにしたい。

## 5 アメリカンメモリアルパークを訪れて

ここにはビジターセンターと二つの慰霊碑が置かれていた。ビジターセンターには、第二次世界大戦期にサイパンが辿った歴史を中心とした展示があった。そこを訪れて最初に約10分のショートムービーを見たのだが、バンザイクリフから飛び降りる人や真下の海が血に染まる様子を実際に撮ったカラー映像が出た時は思わず身体がすくんでしまった。白黒ではなくカラー、写真ではなく動画というところで、バンザイクリフで多くの人が飛び降り亡くなったということが実際に起こったのだという実感が湧き出たのである。

ショートムービーを見終わってから展示を見学した時に印象的だったことが2点ある。

一つは、展示の入り口の右にはフランクリン・ルーズベルト大統領の顔写真と彼の言葉が、対して左には昭和天皇の顔写真とその言葉が記されており、二者が対比されていたことだ。二国の戦争の主導者をそれぞれ代表して挙げるとするならば、フランクリン・ルーズベルト大統領の対になるのは東條英機首相だと自分が無意識に思っていたことに気付かされた。実際に持っていた裁量権の大小からみて私はそう思っていたのだが、アメリカでは国家元首である天皇が主導したというイメージがあるのだと知りその差異は両国の立場や視点の違いから生まれるものなのだろうと感じた。

もう一つは、サイパンで戦闘したアメリカ軍兵士が語ったスーサイドクリフでの出来事だ。それは以下のような内容である。兵士が命令にしたがってスーサイドクリフに向かうと、そこでは数多の人々が集団自殺をしようと飛び降りていた。そこに向かった部隊は集団自殺をやめさせ投降を促す任務を負っていたので、日本語やチャモロ語で必死に喋りかけたのだが、そこにいた人々は全く聞く耳を持たず身を投げていく。部隊は3時間にわたって説得を試みたが最終的には諦めて、飛び降りる人々や自分の番を待つ人々を背にして山を下ってしまった。この証言を見て、軍国教育によって人々が洗脳されることの恐ろしさを知った。この兵士からすれば次々に飛び降りていく人々は全く異様な生物に見えていただろう。しかし、飛び降りる人々にはアメリカ軍の兵士たちがどのように見えていたのだろうか。それを想像すると、言葉には表せない悲しみが湧き起こってくる。

## 6 おわりに

グアム・サイパンを訪れて、自分の価値観や考え方の違いや偏りについて気づかされる機会が何度もあった。国際平和を実現しそれを保つためには、他の文化・歴史を知り、対話をして自分自身の考え方と相手の考え方の違いがどこから生まれ、それを踏まえてどのように歩み寄れば良いのか模索する必要があるのだと感じることができた。このような貴重な体験をする機会をくださった区職員の方々、その費用を拠出してくださった千代田区と関わる皆様方に深い感謝の意を表したい。

## 7 参考文献

以下全て最終閲覧日は2024年1月22日。

<https://www.britannica.com/biography/Martin-Niemoller>

<https://www.takaamerican.com/125021252512464/martin-niemoller>

[https://www.guampdn.com/news/local/keeping-chamorro-language-alive/article\\_a71c9246-ee20-545b-ade0-210e4b4b0e7d.html](https://www.guampdn.com/news/local/keeping-chamorro-language-alive/article_a71c9246-ee20-545b-ade0-210e4b4b0e7d.html)

### サイパン戦争体験講話

令和5年12月15日(金)

#### ■はじめに

今回、戦争当時の経験を後世に伝えるために、皆さんのために戦争の体験を語っていただけないかという願いがありました。そこで、私は快く引き受けました。

今から話す内容は、もちろん全て事実で、私が経験してきたことです。少しでも皆さんの心に残って、また皆さんが次に伝えていただければなと思っています。

私は、父親エリアス、母親カルメンのサブラン一家の子供として11人きょうだいの6番目として誕生しました。当時の自宅の住所は、ガラパン市の南三丁目という地区にありました。

#### ■サイパンについて

サイパンについて、皆様も十分学ばれていると思いますが、基本的な情報を共有させていただきたいと思います。サイパン島の起源は実に600年前、統計的にはフィリピンの東、グアムの北、日本から1,500マイル、約2,451キロ南に位置しております。長さ15マイル、約19キロ、幅は5マイル、約9キロ、中心部のタポチョ山の高さは1,500フィート、473メートルです。ちなみに、東京都と大きさを比較すると、東京都の面積の約200分の1になります。

#### ■空襲前の生活

私は、サイパン公学校に小学校5年生まで通いました。毎朝7時に日本の国旗を掲げることから始まって、サイパンの神社の掃除をし、それからラジオ体操で準備運動をしました。授業が始まる前には、日本の方角に一番近い北の方角に向かって天皇陛下に最敬礼、それが日課でした。また、日本語の読み書きを習い、日本語が上達するように勉強させられました。

当時、私たち家族の住んでいた家は、サイパンへ移ってきた日本軍の関係者たちが住む場所を確保するために、日本軍に占領されてしまいました。

姉のマリアは、毎週日曜日にガラパンにあるカトリック教会でオルガンを弾いていました。父は、姉が私たち家族を楽しませることができるようにとオルガンを買ひ、そして姉は教会で演奏していた曲の数々を夕食のたびに披露してくれました。姉の演奏に合わせて、家族一緒にサイパンの歌や日本の歌を歌っていました。

1944年2月のある早朝、日本人の憲兵隊たちが来て、家から出て行くように言われました。そして彼らは家からオルガンを持ち出して、斧で粉々に壊し



デビッド サブラン  
David Sablan さん

1932年4月2日生まれ  
92歳(訪問時)  
日本委任統治時代に生まれ、戦争を体験。マリアナ政府観光局の会長や北マリアナ連邦知事の筆頭補佐官を務めるなど、サイパンの発展に寄与した。現在は、自身の経験を伝える活動を続けている。







たのです。後でわかったことですが、その憲兵隊は、沖縄出身の農民たちから、私たちがオルガンを使ってアメリカ軍にメッセージを送っているという情報を入手していたのです。憲兵隊はその後、父と姉、近所にいた他2人を逮捕して、そのままガラパン市の軍の本部へと連行していきました。

間もなく憲兵隊は、姉を含めた3名を釈放しましたが、父は、さらなる調査の名目で牢屋に入れられました。父はアメリカのスパイとして告発され、そのオルガンはアメリカとの通信に使われたとしての追及を受けました。父がスパイとしてアメリカと通信していたという告発は全くの誤報であり、2か月後の1944年4月、父の容疑は晴れて、釈放され、ガラパンからようやく私たちのもとに戻ってきたのです。

### ■空襲のはじまり

1944年6月10日、日曜日のことでした。米軍機がサイパンとテニアン（サイパン島の南西にある島）への空襲を開始したのです。

この日兄と私は、食料を分けてもらうため、日本軍の戦車大隊の友人を訪ねようとしていました。ちょうど外に出たときにあちこちで爆弾が炸裂し始め、父は大きな声で私たちを呼び戻しました。

その後、米空母の戦闘機は休むことなく空襲を行い、日本軍も応戦。日米による絶え間ない砲撃と空中戦が展開されたのです。

当時、私たち家族はサイパンの南西部、チャランキザと呼ばれる地区に住んでいました。攻撃から2日目、父は私たちを守るため、洞窟に行くことを決めました。家から北の方角にあるタポチョ山近くに大きな洞窟があるのを思い出したためでした。私たち家族はタポチョ山から約3マイル、5キロほど南にある洞窟までの激しい道のりを進んで、ようやくの思いでたどり着きました。洞窟には地元の家族連れも何組かやってきて、洞窟のすぐ近くに住んでいたゲレロ一家、クリストモ一家、セイマン一家など、ほかの家族の方たちと生活を共にすることになりました。全員で20名ほどの共同生活で、この洞窟はその全員を収容するには十分な広さだったことを覚えています。

戦闘は5日間、昼も夜も続いていきました。父が洞窟にあった穴からから西の方角の水平線を眺めると、何十隻もの米軍の艦船が西の水平線を埋め尽くしているのが見えたといいます。それから間もなく、米艦船から多数の小型船が軍隊を乗せてサイパンの浜辺に近づいてくるのを見たのです。

### ■米軍のサイパン上陸

1944年6月15日の朝、米軍の戦闘艦の大艦隊がサイパンの西の地平線を覆い尽くし、米軍のサイパン上陸がいよいよ始まりました。

私たちは洞窟での避難暮らしを続けていました。毎晩若者たちがサトウキビ畑に忍び込み、サトウキビを刈って洞窟に持ち帰り、毎日の食事にしていました。

3週間ほど続いたある朝、彼らがサトウキビを取りに行ったときに日本軍の一団が通り過ぎるの見かけて、サトウキビ畑に身を隠し、軍人たちが去った後に大急ぎで洞窟に戻ってきたことがありました。その頃には日が昇り始めていたため、沖合の米軍艦船から洞窟近くの丘で人がはっているのが見えて、艦砲射撃を始め、私たちの洞窟の入り口付近で爆弾が落ちたのです。

幸い私たち家族は無事で、その後米軍に保護され、キャンプに収容されて助かりました。以上が、私が体験した幼少期のお話です。

### ■次代を担う皆さんへ

今回、このような形で私の戦争体験を皆さんにお伝えすることができて、本当に感謝しております。このような場を設けていただいて、また、皆さんとこうやって戦争について、平和について考える機会をいただけたことにとっても感謝しています。

いろいろな人種が当時もいて、自分たちだけではない、ほかの人たちもたくさん苦しみました。そういった中で、今日この場で皆さんと会えて、つながっていけるということはすごく素晴らしいことです。ぜひ、今日の日を胸に覚えて、忘れないでいてほしいと思います。

北マリアナの人間の代表として改めて言わせていただきますが、私たちはすごく日本の方が大好きです。サイパンというところは一時期、昔はツーリズムで大きかったのですが、だんだんと今は衰退してしまってきているので、またこういう機会を通して皆さんにサイパンのことをもっともっと知っていただければと思っております。

## デビッド・サブランさんへ質問

**Q.** つらい生活を送ってきた中で、何が精神的な支えとなっていましたか？

**A.** 日本人としての教育を受けていたこともあり、精神的強さはそこから学びました。また、「毎日必ず運動をすること」を公学校の先生から教えられました。それが精神的、体の健康を保つ秘訣だと思います。

**Q.** 今なお起きている戦争について、戦争経験者としてデビッドさんはどのように感じていますか？

**A.** 何があっても平和を築いていくという、その連携が絶対に必要だと思います。戦争は絶対に良くない。対話をして平和を築いていくというところを信じています。

**Q.** 当時日本がサイパンを統治していたにもかかわらず、日本を好きになった理由を聞かせてください。

**A.** 日本の教育で教えられたことが、体にも心にもものすごく染みついています。今健康でいられるのも、そのときの教育のベースがあるからです。そのため、日本を心から尊敬しているし、その教育を受けてきたことを誇りに思います。日本が大好きです。



サブランさんの娘さん デビッド・サブランさん

通訳者さん